

現代のスパイは白晝大手を振つて我々の前に現れる。

スパイが變装して軍需會社へしのび込んだり、盗み出した秘密地圖を風景畫の中に描き込んだりするテは、すでに前大戰の遺物である、四方を敵國乃至敵か味方かハツキリしない中立國でとり巻かれてゐるヨーロッパの國とちがひ、我が國の場合では、第一變装したつて日本人と白人とはすぐわかるのだし、日本の憲兵、警察制度は世界一に發達してゐるのだし、素人探偵が活躍してスパイを捕へる大活劇なんといふことは、まづできない問題で、要は秘密を嚴守すること、デマに乗せられないこと。筆者は、今の日本人に一ばん必要な防諜心得はこの最後のことだと心得てゐる。

「〇〇〇〇といふ映畫女優が、スパイの嫌疑で摺つたそうだ」

「そして、とうとう銃殺されたそうだ」

などいふデマは信じてても、また、他人へ受賣りしても、ことがことだけに、別に國家に不利をまねくわけではないと、面白づくで喋言つたとすれば、そのことは直接國家的不利の結果は生じないだらうが、少くとも、

「日本人のどの人たちに、デマを吹きこめば、どのくらゐの速さで、どの方面へ廣がつて行く」といふ材料は、ちやんと敵方にとられてしまふわけではないだらうか。

前大戰の時、一ども戰場で負けたことのないドイツは、遂に國民に對する英國の謀略のために自壞作用を起して負けてしまった。

今もし、筆者が、米英の謀略係だつたら、どうするか、といふと、

「ドイツは日本ばかりに働かせて、自分は黙つてウマイ汁を吸はうとしてゐる」と第一にデマを飛ばす。

次には、

「北があぶない、今のうちに、北西の國境をやらなければ、本土があぶないと、デマをとばす。

これは割合に効果があるだらうと思ふ。

何故か、といふと、北の方といへば、國民はすぐに本土空襲といふことを考へるだらうし「ソ聯邦の航空隊は非常に優勢であるから（この前提も、もう一度、考へなほしてみる必要があるの

だ。何百臺の飛行機が来れば、一度に本土はメチャク〜になつてしまふ」

といふ結論には、ひとりで行きつかせることができるだらう。その揚句、

「海軍の艦も、陸軍の飛行機も、本土をあけつばなしにしないで、半分ばかりは本土の護りに歸つて来い」

などいふ聲が起れば、もう、米英スパイ部長たる筆者は、ペロ〜と舌を出して喜ぶのである。たゞし、このテは、四月十八日にアメリカが空襲でヘマをやつたので、絶對的有效ではなくなつたらしい。

一ばん利き目がある、と思ふのは、前大戦のドイツもそれで参つたし、いつの世にも通じるテなので、それは、國民生活を不安に導くのだ。平たくいへば、衣食住の問題を、ほじくりまはすのだ。

中商工業者の一部は、職にはなれなければならぬ。そこをねらつて不平を吹き込む。

今だに、内地米に戀々たる人があるとすれば、その人に向つて「こんなまづい米を食はされるのも戦争のおかげだ」とやる。その人が「戦争さへなければ——」と考へてくれれば、大へん都

合がよい。

人間は、食ひ物でいぢめられると、一ばん悲鳴をあげる、といふことは、情ないことだし、平常食ひ物に困らない時には、そんな馬鹿なことが、と信じにくいだが、嘘のないところである。イギリスにしろアメリカにしろ、個人主義の本山で、金のあるものが、今いかに闇取引をして買だめしてゐるか、それが食物に始まり、食物に終るのであるといふことは、時々新聞が傳へてゐることであるし、前大戦のドイツが遂に音を上げたのも、煎じつめると食料問題であつた。

女の人の中には、他を犠牲にしても、いゝ着物を着たがるのがあつた。いや着たがる、ではなく自己の所有物として、簞笥の中のため込みたがるのだ。

それも食ふ物あつてのことであるが、食ふ物はたまには食はないでも、着物の數の多いのを誇りとする場合もある。そこをねらふのも効果があるだらう。

戦争がすめば、美の標準もガラリとかはり、第一、御自身の顔に、好むと好まざるに拘らず、シワといふ代物がふえて、もうそんな着物を着られるはずもないのに、えてして「いづれ着られる時が来たら」と、月日と歴史の移りかはりを心づかず、呉服屋の番頭の口車にのせられて、聞

取引といふ大罪を犯しやすしい一群があるなら、そこが、ねらひどころだ。

がしかし、それ等の策も勝利につぐ勝利をもつてする日本人に、大した効果を期待できない。となつた上は、最後の奥の手を出す。

それは、もう戦ひは勝つた、と有頂天にさせることだ。

これは、ちよいと説明を加へないと誤解が起る心配があるし、それだけに、微妙な問題で、スパイ係りたる筆者の腕のふるひどころでもある。

戦争中、國民の士氣を衰へさせることは絶対禁物である。敵を呑むの氣概は何ものよりも必要である。しかし、これが脱線すると「敵を呑む」といふことが「敵を侮る」といふに變り「戦捷の歡喜」が「戦捷に酔ふ」といふことに形をかへる。これが何より恐しいことであることは、東郷元帥が、明治三十八年十二月二十一日、旗艦朝日（三笠は、日露媾和成立した五日目の九月十日の夜、東郷長官が上陸東上したのを待つてゐたやうに、火薬の自然變質が原因で、佐世保港内で爆沈した）の艦上で行はれた、記念すべき聯合艦隊解散式の時に、別れて行く部下に與へた訓示の末尾に、

「——神明は、唯平素の鍛錬に力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授けると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者より直に之をうばふ。古人曰く、勝つて兜の緒を締めよと」

この訓示を、そのまゝこゝへ書いておけば、我等日本人にとつてこの上の解説は必要ない筈である。

ない筈ではあるが、特に東郷長官もこの點を強調された、といふことは、人間の弱さが、ついでこの過ちを犯すことを戒められたのであらう。

日本海々戦が空前の大捷に終つたその翌日、長官の命で艦隊は猛訓練をした、といふ有名な話も、以上の考へを實行に移したのである。

これは、軍人に對しての訓示である。しかし、そのまゝ國民への訓示でもある。

昔からさうではあるが、國內がむしろ第一線である現在では、國內の事情が前線を左右するまでいはれてゐる。

「銃後」といふ言葉をつかつて、戦ふのは軍の仕事といふ考へは、ことに四月十八日の本土空襲以來、國內からは消え去つたはずであるが、それ故にこそ、一戦に安ずる氣持が國內にはびこ

れば、軍艦内にベスト菌をまき散らしたほど、敵にとつては好都合であるわけだ。油断と奢は、ベスト菌以上に恐ろしい。なぜか、といふと、ベスト菌は誰でも警戒するが、勝利におこる心は、その味が甘いだけ、人々が警戒しにくいからである。

米英が、自分たちが負けてゐる、といふ事實を逆用して、戦捷日本人の氣持を有頂天にさせ得れば、その大穴から、彼等得意の宣傳を吹き込んで、國民の足腰を鈍らせることは、易々たるものだ。

前掲の訓示は、戦後のものである。もし、只今の戦争中に、この訓示の意にそむかせることに成功したら、一たび傘下についた東亞共榮圏の國々住民たちが、忽ち、厄介至極な大荷物となつて我が國を押しひしひで来るだらう。

米英人は、常にいつてゐる。

「戦争は最後に勝ちさへすればいい。その途中の勝敗などは、問題でない」
しかも、英國は、二十五年前に一度このテで、みごとに成功してゐるのだ。

14 米英人なら考へが別だ

デシノはデタラメのデマを飛ばしたのではないことは、前に言つた。

筆者の父は、當時大本營の幕僚を仰せつかつてゐて、今で言へば報道部課長といつた役目をしてゐたのであるが、當時の様子をよく話す。

「敵艦隊が東航して来るに従つて、時々刻々情報はいつた。

さうして、その最後のものは、マニラから口の津に向ひ航行中の、三井物産の備用船、ノルウエー汽船第二オスカル號といふ船が、五月十九日午前九時頃、臺灣の南方でロシア艦隊と出あひその臨検を受けた後に解放された、といふ報告だつた。

その時、臨検したロシア將校が、オスカル號の船長に向つて、自分たちの艦隊は、朝鮮海峡を通つてウラチオに行くのだ、と口を迂らした、とつけ加へてあつたので、サアこれが問題になつたね。

大本營の私たちの仲間でも、艦隊の方でも、いろ／＼な説が出たもんだ。

その時、東郷大將はどうしてゐられたか、といふと、やつぱり前と同じく、少しも頓着せず泰然不動の形だつた」

そこで筆者が口をはさむ。

「私ならどうするでせう。いくらロシアの將校が間抜けでも、ほんたうのことを喋言るわけはなし、といつて、嘘をいつたとすれば、その嘘にすぐ日本艦隊がひつかゝると思つて言つたのでせうか。それとも、もう一つ裏を行つて、さう喋言れば、朝鮮海峡を通ると口に出したのだから實はほかを通るつもりだらうと日本側が考へるだらうとロシア側で考へてゐる、と日本側がもう一度考へて、朝鮮海峡を通過する、と判断するか、またその裏を行つて、それ故、ロシア艦隊は朝鮮海峡へは來ない、と断定させる氣かもしれないし、また一つ裏を行つて……」

「さう、お前のやうに裏から裏をくゞつたら、何が何だかわからなくなつてしまふ。

私（父）は東郷元帥詳傳を書く時に、このことについて、元帥はどうお考へになつたのですかと伺つてみた。ところが、いくら突込んでみても、元帥は例によつて、微笑を浮べただけで、何も言はれなかつた。

まあ、私の推測する限りでは、――

まさかに、そんな大事を口走るはずはないから、さういつて安心させておいて、實は他の航路をとるかもしれない、と元帥が判断して、少くとも朝鮮海峡の警備はうすくなる、といふ策だらう――さう東郷元帥は考へられて、かへつて、朝鮮海峡から一艘の艦艇も移動させないといふ方針に、大自信を得たのだらう、と思ふよ。

お前のやうにものを考へすぎる人たちが、いろ／＼議論したことはしたのだ」といつた。

なるほど、さう言はれると、さうかもしれない、といふのは、東郷長官が前に人に漏されたことがある。

それは元帥の親友である、九鬼隆一男爵が發表された話である。

「――そこで東郷大將は、我が艦隊を率ゐて、我にまさる敵の大艦隊をむかへ撃たんと決心され明後日出發せらるゝといふ其日に（といふのは、例の「誓つて撃滅いたします」と言上した時のことである）拙者は御送別に參上した。

ところで東郷さんが言はれるには、

「九鬼君、もし日本海へんで戦闘が開始せられたならば、それが本戦役（日露全戦役）の終結であると思はれたい。

新來艦隊をやつてしまへば、足も羽もないからねえ。

敵が陸軍の方でいくら威張つても、そりや仕方があるまい。日本には、敵さりやしないからねえ」

と、かういはれたから、拙者がいふたには、

「東郷さんどうです。敵の艦隊は、餘程優勢ぢやありませんか。それを全滅する前に、こつちがどうです」

といふたら、

「そりや、こつちがやられることは、どれ程やられるか判らないがねえ。

これをやつちまはないうちは、僕は死なない。なあに、そりや確かだ」といはれるから、

「東郷さん、あんたは實に意を強うすることを言ふて下さる。みすく大優勢な敵艦隊を前に邀へて、今のあなたの大雄志は、じつに大層なことで、それは人間わざではない鬼神の様ですな」といふたら、

「いゝや、僕は鬼神でも英雄でもない。けれども此方は大分稽古したが、彼方は、無経験だからねえ。

そりや、あれをやつちまへば、ロシアの艦隊は全滅だ。さうすると無論平和にするより仕方がなからうよ」

そこで拙者がいふたには、

「いかにも結構、いかにも有がたい。うれしい。どうしても今のあなたの言論は、全く人間以上で、勇氣凛々、戦はずして強敵を呑むの慨があつて、帝國を擁護する大精神が、潑刺として迸つて見えるですが——そこで、果して日本海へくるでせうかねえ」

と尋ねたら、

「それはわからん。そこが敵と味方との大戦略のあるところで、こつちが待ちぶせして居るのに

敵がうまくはづして、他の方面に大發展をしたら、その一事において、既に我れが大分負けたのである」

といはれた。ところが果して、大將の先見、作戰の通りに、少しも違はぬ大結果を見たのである——」

口では「それはわからん」と言つてゐたが、長官は、敵は朝鮮海峡に來ると斷じ、しかも相手が、デシノなどを使つて、小刀細工をすればするほど、その確信はかたまつて行つたのだ。

東郷長官は、日露役五年前の、三十三年北清事變の時、常備艦隊司令長官として、旗艦常磐にのり、天津外港の太沽に行つた。

すると、五年の後に敵として相まみえるべき運命の、ロシア極東太守のアレキセイフ大將は、戦艦ベトロパウロウスクに乗つてやつて來て自分が東郷長官より先任なのにも拘らず、のこくと常磐に出むいて、得意の辯舌をふるひ、自國海軍の優勢を誇り、その間に、日本海軍の肚をさぐらうと試みた。

相手が東郷長官であるだけに、日本海軍の肚さぐり、といふことは全然收穫がなかつたばかり

でなく、アレキセイフは、結構なお土産を長官室に、いや、東郷長官にのこしてかへつたとは心づかなかつた。

東郷長官は、北清事變後内地へ歸つて、そのお土産の中味を見せた。

「今回の出張中、特に露國海軍に就てみたところは、ロシア海軍といふものは、世界が恐れてゐるほど恐しいものではない、といふことだつた。アレキセイフは、頻りに自慢してゐたが、彼のいふことは、自分から見ると、嘘が多かつた。

規律も彼のいつたやうに嚴肅ではなく、訓練も不行届の點があり、最も注意すべきことは、軍艦を使つて、陸兵や軍需品の運搬をしてゐたことだ。

これは、運送船の不足、といふことも直にわかることだが、それよりも、ロシア海軍が軍艦の本分を重じてゐない證據で、乗員も、訓練より他の仕事に追はれることになり、運送船の不足と共に、戰爭準備は存外に不整頓と思ふ」

アレキセイフも、デシノの如く、逆の効果を我知らず引出したことに氣がつかなかつた。

東郷長官は、ロシア人といふものを深く研究してゐた。その結論として、第二オスカル號船長

に語つた、ロシア士官の言葉も、その眞の意味を簡單につかむことができたのだつたと思ふ。

朝鮮海峡に敵を待ちぶせる時、次のやうに漏らされたことが明かになつてゐる。

「これが、イギリスやドイツを向ふに廻すのなら、また別の考へかたがあるのだが、相手がロシア人だから、これでいゝ」

といふのだつた。

ロシア人は馬鹿正直なところをもつてゐて、さう嘘をつくことのできる國民ではない、といふことを、明瞭に知つてゐられたのだ。

だから、このごろ、一部の人がいふやうに、

「東郷さんは、日露戦争の時だから、あゝまでうまくやれたので、大東亞戦の司令長官として、数回手段に長じてゐる米英を相手にしたら、果してあゝうまくやれるかしら」

といふ淺薄な論議は意味をなさない。

「相手がイギリスなら（アメリカなんかは、その點イギリスの遙か風下だ）また別のやりかたがある」と三十七年前に言明してゐるのだ。そればかりでなく、日露戦争後、次に來るべき相手は

アメリカだ、と見込みをつけ、すぐ、アメリカに對する對策を立案した、といふことは、あとで詳しく書く。

敵の艦隊速力を推算し、豫想航路上で計算してみると、敵艦隊が朝鮮海峡に姿を現すのは五月廿五日ごろと推定された。

デジノと力を併せ、艦隊の方でも、いよいよ日本艦隊間近となるや、まづ、三つの東郷惑亂方策をきめた。

- 一、假裝巡洋艦テレーグ、タバニーを日本の東海岸に出没せしめ、チラリ／＼と影を見せて、その方面に敵（日本）艦を引つけること。
- 二、假裝巡洋艦ドネイブル、リオンを黄海方面に出没させ、同様の目的を達すること。
- 三、艦隊の朝鮮海峡進入二日前に、上海の方面に運送船の一部を出現させ、右の目的を達すること。

この計畫どほり、二十一日に太平洋方面への派遣、二十二日には、右の三つの方策の他に、途中、拿捕した英船オールド・ハミヤ號に兵隊を乗せ、一ばん北の宗谷海峡を通つてウラヂオに向

はせた。もちろん、目的は同じことである。

ところが、だらしないこと、いつたら話にもならないといふのは、テレーグ、タバニーの二艦は、日本東南岸に出ては来たが、ほどよく、チラリ／＼と姿を見せる手はずのところ、陸岸から何十哩といふ遠い沖を航行したから、陸上の我が見張り所からは、全然姿が見えなかつた。そのうちにテレーグから手旗信號をタバニーに送つて来た。

「最早目的は充分達せられたと思ふ。長居をして優勢な敵にあつては面白からず。そろ／＼本國へ引かへさうと思ふ。貴意如何？」

信號をうけたタバニーは、待ちかねたやうに

「異存なし」

と、手早く信號をあげ、同時に士氣はにわか奮ひ立つて、兩艦は全速力を出し、グルリと頭をまわすと、一目散に一萬五千哩の彼方、ロシア本國に向つて走りだした。

自分たちのやつたことがロシア艦隊にとつて、どのくらゐの助けになつたかどうか、そんなことより、その時の乗員には、目先にチラつく、妻や子の幻影を追ふ方が大事であつた。

そんなことは、ロジエストウエンスキイ中將は少しも知らない。二艦は、命令どほりのチラリ／＼を適度にやつて、充分日本海軍をなやまし得たところと思つたから、得々として、翌二十三日には各艦に最後の石炭積込をやらせた。これが砲弾では戦艦は絶対に沈まぬ、といふ當時の世界中の定説をはじめから覆す最大の理由となつたのだから、ロ提督の頭は、チトどうかしてゐた。

二十四日になると、不幸がロシア艦隊のまん中でおこつた。敏腕で徳望家であつた、司令官フエリケルザム少將が、こゝまで来ながら病死をしたのだ。

もしこのことが知れたら、あれだけ部下將士に頼もしがられてゐた少將のこと故。(ロジエストウエンスキイは少しも頼もしがられてゐなかつた。これはあとで出て来る) 全艦隊の士氣が沮喪するから、絶対秘密にして、乗艦である旗艦オスラービヤには、知らん顔して、將官旗をあげさせてゐた。將官旗とは、その旗の示す將官が、たしかに生きて、本艦に乗艦中といふことを現す旗である。

そして、翌二十五日、上海に近い馬鞍群島に近づいたので、豫定のとほり、假裝巡洋艦ドネイブル、同リオンに運送船六隻をつれさせて、上海に送りつけ、更に二隻は黄海を北上して、ロ

シア艦隊こゝにあり、といふ身ぶりをさせた。

こつちの方はうまく運んで、その情報は、すぐに東郷長官の耳にはいつた。すると今度も長官は、以前のやうに

「さうか」

といつたが、そのあとで、會心の笑といふのを、チラと口唇のはしに見せた。

秋山眞之先任参謀も、それをきくと、長い間の心痛を忘れたやうに、手をうつて、

「もうしめたぞ！」

と熱情漢らしく床を踏みならして喜んだ。

なぜ、さうハッキリ喜んだのかといふと、

例の本國へ逃げかへりの二假裝巡洋艦が、チラリ／＼をやり／＼をやり／＼に太平洋の方へ出て行くと同時頃かへつて、ウラチオストックを出て来たウラチオ艦隊の生残りらしい艦が、日本海の隠岐の島の附近で、我が方に発見されてゐたのだつた。

五月二十二日大本營着電の電文は、そのことを報告し「ウラチオ艦隊と思はるゝ敵影が隠岐附

近に現れたことは、南方の敵と合同するつもりとより考へられぬ故、ロシア艦隊が接近せんとする徴候と認め、昨日來、全軍出動準備の姿勢にありて警戒す」

とあつて、この時已に、敵は近くにまで来た、と全軍勇躍したのだつた。

しかし、最後の斷定を下すには、それだけの材料ではたりなかつた。

敵だつて、フイに氣がかはる、といふことがないとも言へない。

もしや、といふ一つの疑念が人々の頭に浮んでゐる時、

「敵運送船上海に入港」と来たから、もはや、敵全軍は朝鮮海峡より他へは絶対に來ない、と誰にもハッキリわかつて、秋山参謀の喜びとなつたのだ。

遂に東郷長官の豫想は適中した。

東郷長官の信念は勝つた。

東郷長官の至誠は天に通じて、敵艦隊は、思ふ壺に引きよせられた。

敵は上海入港によつて我方を惑はせようとした。その計畫はまたしても——しかも致命的に裏をかゝれて「それ故に朝鮮海峡へ來る」といふ反對の斷定を日本側にさせてしまつたのである。

日本本土の東を大まはりするならば、もう一度海上補給をしなければならぬから、運送船を
 はなすわけはない。朝鮮海峡の近道をかけぬけて一戦するつもりだからこそ、足手まとひの運送
 船を手ばなしたのだといふ推理の鍵を日本艦隊にわたしてしまつたのだつた。
 その夜、半年に亙つて頭を疲らした幕僚連は、はじめて、グツスリ眠つた、といふ。

15 至誠の具現

米英は、日露戦争の記録を、なぜふりかへつても見ずに、盲目と蛇との關係に於て、大東亞戰
 を勃發させ、さうして、負けつゞけてゐるのだらう、と筆者は敵のため惜んでやつた。
 ところが、ヨーロッパ諸國では、近ごろ、日露戦争の研究が大流行だといふ話をきいた。
 理由をきくと、さすがに、ヨーロッパ人の眼のつけどころは的へ來て居る。

大東亞戰と我國で稱へる第二次世界大戦の原因は、誰でも知つてゐるとほり、第一次大戦にあ
 るのである。

では、第一次大戦はどうして起つたか、といへば、その氣運は、日露戦争でロシアが敗れたと

ころから生じた、といふ見方であつて、これは正しい眼のつけどころである。

つまり、歐洲大陸の北方の雄として君臨してゐたロシア帝國が、日露戦争の結果、革命の白蟻
 に土臺骨を食ひあらされ、殆ど無力に等しい形だけの大國になりはてゝゐなかつたとすれば、前
 大戦は、恐らく勃發してはゐなかつであらうし、起つてゐたとしても、まるつきり違つた形で宣
 戰されたであらうといふのが、にわかには、日露戦争、ことに日本海々戦を中心とする、日本研究
 熱が流行しだしたものである。

まつたく、そのとほりである。

ヨーロッパ人は、前大戦で、どこの國の者も、例外なく苦い汗を吞まされてゐる。大戦の惨苦
 を身にしみんと味つてゐる。第二次大戦が勃發すると、すぐその頭を前大戦の尻尾に結びつけ、
 前大戦の頭を結びつける何かの尻尾をさがすうちに、日露戦争といふ三十七年前の事件の尻尾を
 さがしあて得た。さすがに、といつたのは、前大戦の苦しみを味ひつくしてゐる彼等であるから
 といふ意味であつて、特に彼等の歴史眼がスベラシイといふ意味ではない。

とすると、我々はこの前の大戦で、惨禍をうけなかつたばかりか、大部分の國民は、ヨーロッ

パ人とは反對に、甘い夢さへ見てゐられたのであつたから、近代の歴史を見る時に、前大戦を重視しない傾きがないでもない。

大東亞戰の近因を、とかく、ワシントン會議以後に定めて、ワシントン會議がなぜ開かれたかといふと、「だん／＼日本が強くなるのを、米英が恐れたから」など、漠然と片づけてしまはうとする。

大東亞戰の芽は、日露講和と同時に双葉となつて我々の氣づかないやうなところに顔を出した。海軍では、それに氣がつくや否や、ハツキリと次の大敵が誰であるかを知り、それに備へる準備オサ／＼おこたりなかつた、といふ過去とのつながりの糸も見おとしがちであるのだから、その間にはさまつた、前大戦の因果については、遠い地球の向ふ側の大さわぎだと考へ易いのも一應はムリもない。

ロシアの敗北は、世界一の陸軍國であり、世界第二の海軍國であるといふ、ロシアの地位を顛落させた、しかも、内には、グラついた屋臺を深くむしばむ、革命の毒素がはびこつてゐた。ヨーロッパ諸大國の、微妙な力の均衡の一角が崩れだした。その崩れ穴から前大戦は引出されたのであつた。

であつた。

日露役に、ロシアの敗北を決定したのは、日本海々戦での、ロシア艦隊全滅の事實である。

ロシア艦隊全滅を招來したのは、朝鮮海峡に、じつと敵を待つた東郷長官の不動の信念と、開戦のはじめに行つた、有名な、敵前回頭といふ必勝戦法とである、と要約される。

この章では、右の二つの重大な事からについて語つてゐるのであるが、讀者の参考のために、外國ではこの二つをどう見てゐるか、それを對照しながら話を進めて見やうと思ふ。

おもに引合に出されるのは、ドイツ人、フランク・ツイースの書いた「ツシマ」である。他にもいろ／＼の大海戦の記録や主張が出てはゐるが、多くは、色眼鏡をかけて、ことさらに、ロジエストウエンスキー中將——ひいては、當時のロシア政府を、罵倒してゐるものが多い中に、この書は、まるつきり違つた見かたで、ロジエストウエンスキーこそ、眞の英雄であり、東郷の立場は必ずしも東郷でなくても、他の日本の有能なる將官なら、誰でも代れるものだ、と斷定してゐる。

この見方は、讀物的にはちよいと面白い。ことに、ヨーロッパ人の眼に映つた兩雄の比較論と

して讀めば興味がある。たゞ残念なことには、世界中の史料を集めた、と稱するこの書の中で、重要な點で間違ひが度々出て來ること、自分の主張を通さうため、わざと間違へたのか、研究の不足か、或はまた、ヨーロッパ人としてはこれ以上に、眞實を眞實として受けとれなかつたのかは知らないが、——筆者は、おそらく、最後の理由であらうと思ふ——その點を一應心得て讀み進んでもらひたい。

五月二十五日、上海へ、ロシア艦隊附屬の運送船が入港した、とわかつて、いよくロジエストウエンスキーは全艦隊を率ゐて朝鮮海峽へ來る、ときまつた。

しかし、敵の姿を見るまではまだ安心はできない。

ところで、敵の推定速力ではかつてみた、豫定時刻になつても、敵艦隊は豫定地點へ影さへも見せなかつた。

しかし、東郷長官はジーツと、身じろぎもしないで待つてゐた。

すでに、その以前に、萬一敵の氣がかはつて、九州の南へ身をかはし、太平洋側を北上するといふことがあるかも知れないから、或時期までに敵艦が朝鮮海峽へ現れなければ、聯合艦隊は適

當な方面へ移動すべきであらう。とすると、その「或時期」といふ重大な、國家の興亡に直接ひびく「時期」をいつにきめるか、といふ問題が起り、艦隊の幕僚間にも議論が戦はされ、大本營との間にも意見の交換があつたのだが、東郷長官だけは、たしかに北方にまはつた敵を發見するまでは、居どころをはなれぬといふ信念をかへず、只一回も軍議を開いて、各々の意見をきく、といふことも實行しなかつた。

連日連夜に互つて會議が開かれたらう、といふのは我々の常識で、また、さうであつたやうに傳へる人もあるが、それは斷然間違つてゐる。

この時はおるか、全戦役を通じて一度も、長官を加へての軍議といふものは開かれはしなかつたのだ。

あくまで朝鮮海峽説を主張する第二艦隊司令長官島村中將は、藤井參謀長をつれて長官の心が動搖しはしないか、と三笠長官室を訪ねたことがある。五月二十四五日ごろのことだ。

「敵は、どの海峽を通つてウラヂオに向ふとお考へになりますか」

と島村長官が切り出すと、藤井參謀長は、瘦身をこわばらせて、にらむやうに東郷長官を見つ

めた。

「この海峡だと思ふ」

東郷長官は水のやうに淡々と云ひ去つた。「それならば……」何も云ふことのなくなつた二人は熱した頭を冷水で冷されたやうな気持ちになつて、藤井參謀長の如きは、つひに一言も口を開かないで長官室を去つたといふことが、當の島村中將の口から明瞭に語られてゐる。

二十六日には、もう誰も、朝鮮海峡説を打消すものもなくなつたことは、前章の終りのとほりであるが、この邊を、ツイースの、「ツシマ」では次のやうに言つてゐる。

「——幕僚士官たちは、ロジエストウエンスキーが（上海へ運送船を放つたことで）朝鮮海峡を通過すること疑ひなし、と主張した。が、東郷は疑ひ深い眼をして、

「之は擬態かもしれぬ。艦隊は十九日の如く——といふのは、南支那海を北上して、臺灣の南で、九十度右へ變針、太平洋へ出たことをいふ——急角度に轉針するかもしれぬ」
と答へた」。

とある。まるで話があべこべだ。

もし、筆者の書いて來たことに少しでも偽りがあり、このツイースの話に、少しでもほんとうのことがあるとすれば筆者は、直にこの本を書くのをやめなければならぬ。

何故か、といふと、この際の東郷長官の信念こそ、八十八年の東郷平八郎の生涯を貫いた「至誠」の念から生れたものであるので、現在、世界の海洋の四分の三を舞臺として、前人未到の大戦果をあげてゐる、山本司令長官以下海軍將士に生きてゐる、いはゆる、海軍魂といふものは、この東郷元帥の「至誠」の念がアミーバの分裂の如く無數に繁殖して根となつてゐるものであるといふ考へをすてなければならぬからだ。

同時に、大東亞戰の神業のやうな勝利を、ヨーロッパ人たちのいふやうに、やはり「奇蹟」と「好運」の二つに、かたづけしてしまはなければならぬからである。

某社が「東郷平八郎全集」を出版する時、元帥の談話をとりに行き、話は、このことに觸れて行つた。

「確かに朝鮮海峡に來る、といふことについては、何か觀られることがあつたのですか」
と、記者は、大眼目を突つ込んだ。誰でも一應は、元帥御本人にきいてみたくなる言葉だ。

元帥は何と答へられたかといふと、

「それはさうだ。一體、津輕海峽、宗谷海峽の方は非常に濃霧のあるところであつて（筆者註 五月末から六月にかけて、あの邊の濃霧は信じられないほどだ）さうして、あの大艦隊を率ゐて来るのに、あゝいふところでは（註、津輕海峽などはせまいところは、大船の通れるのは、十湊にたりないのだ）艦隊行動といふものができるものではない。一艘でもなかくできない。それを多くの艦隊を率ゐて参れば、まだ戦争をしない前に、味方の艦と艦とが多く衝突して、滅茶苦茶にならぬともいへぬ。その上航路が遠いから、石炭も缺乏する。何から見ても、どうしても日本海の方に出て来なくちやならぬのだ」

これは、ロジエストウエンスキーの考へてゐたことゝ、ピッタリ一致してゐる。

そこで記者は、最後の矢を放つた。

「けれども、来るか来ないかについては非常に御心配だつたでせう」

と金的を見つめると、元帥は軽く

「フフン」

といつたきり、黙つてしまはれた。

「フフン」といふのは、返事をしたくない時に、元帥の發せられる言葉だ、と筆者は覺えてゐる。否定すべきだが、いろいろのことを考へてそれを表明しなくなつたのだらうと思ふ。他海峽説なども當時盛んだつたのだから、それ等の説を出した人に當然話の及ぶのを嫌はれたのではないかと筆者は察する、といつて、肯定すれば嘘になるし――

この問題を東郷元帥自身の口から、解決してもらはうとする人は、例外なく同じ質問をして、殆ど例外なく「フフン」を喰つて撃退された。

例外の人で、最もいゝ成績をあげた人は、

「どうして朝鮮海峽と判断されましたか」

といふのに對して

「さう思つたからぢや」

といふ答を得てゐる。

これでは、やはり謎は解けさうにもない、と思ふのは東郷元帥をよく知らない人で「さう思つ

「たからちや」といふ數語は、立派に謎の解決を與へてくれてゐるのである。

東郷さんぐらゐ、天佑と神助を口にした人はない。

三十七年六月六日、聯合艦隊を率ゐて佐世保を出港、はじめてロシアを敵として攻撃を開始しやうといふ時に、部下に與へた命令は、

「天佑を確信して聯合艦隊の大成功を遂げよ」

といふ句が最後にある。

日本海々戦の戦闘詳報には冒頭に

「天佑と神助に由り、我が聯合艦隊は五月二十七八日、敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戦ひて——」

とあり、そのほかにも、重用な命令の多くは、天佑神助を確信すべきことを示してゐる。

天佑といふ言葉が、やゝ亂發され、または何から何まで神業にあげ込んでしまはうとする傾向がないでもない今日、ちよいときくと、東郷元帥はえらい迷信家であるといふふうにとられるおそれ無きにもあらずだから、東郷元帥の口にする天佑といふ言葉は、説明されなければなる

まゝ。

陛下の御前で、撃滅を誓ひ奉り、誰がどう迷はさうとしても、敵は必ず朝鮮海峡に来る、と待ちつゞけたのは、世にも恐しく、類のない自信である。

前述のとほり、東郷大將の八十八年の生涯は、至誠以外の何ものでもなく、後年組織された少年東郷會の發會式での訓話にも、

「どんなに智恵があつても、至誠が缺けてゐてはほんとうの御奉公はできません」と教へてゐる。

至誠、まごゝろ。これこそは、東郷元帥の唯一の信條であり、道德であり、臣道であり、所世訓であり、生命であり、そしてその他のすべてである。

神、といふものは、明鏡に等しい、人間の至誠が神界——天にとゞけば、明鏡によつて反射されて再び人界に下つて来る。これを、天佑といひ神助といふ。

さう東郷元帥は信じてゐられたらしい。

至誠のないところに天佑はないと同時に、至誠に缺けることがなければ必ず天佑神助は在り、

來るのである。

従つて、天佑神助を確信せよ、と折あらば訓示する東郷元帥ほど、至誠の念をもちつゞけ缺けるところなしと言ひ得る人は他にあるまい。

至誠の人である東郷元帥は、誰よりも天佑神助を確信していゝわけである。

その證據は明白である。東郷元帥の至誠の至るところ、いつも奇蹟の如き天佑が待ちうけてゐるではないか。

「天は正義に與し、神は至誠に感ず」の信條を眞向にふりかざして向ふところ、如何なる敵が現れようと、たゞ轟沈の運命を掴み得るのみだ。

「さう思つたからぢや」

と答へる意外、おそらく、東郷元帥自身にも、その時の決心を、うまく言ひ現せなかつたのだらう。

「さう思つたからぢや」

それでいゝのだ。

至誠の人が「さう思つた」なら、敵は必ず朝鮮海峡へ來る。至誠の人の思ふ壺へ、飛び込んで來る敵なればこそ、長官は「さう思つた」のである。

東郷元帥に「さう思」はしたのは、元帥の至誠であり「軍艦旗を見つめてゐよ」といふのこそ海軍々人の至誠の表しかたを教へたものである。

東郷元帥四大訓の三

海はすべてを解決す

1 敵前回頭の逆説

ツイースが

「東郷は朝鮮海峡へ敵が来るかどうか、迷った」

と書いたのは嘘の皮である。五月二十六日に至つては、全艦隊、大本營ともひつくるめて、もう他海峡説を考へる者は一人もゐはしなかつた、といふのが眞實である。十二月八日、眞珠灣空襲の話を読者は覚えてゐるだらう。

天日を見ずに推測航法で嵐の中を走ること幾日、母艦の現在位置さへ不安なはずなのを、その母艦から發した攻撃飛行隊は、これまた推測航法を用ゐて數時間で眞珠灣の上空に達してゐた、といふ。

海上で天體を見ずに幾日か航海すれば、艦は思はぬ方向へ流されてゐる筈である。艦自身の現在の位置をたしかめるのは、天體の高度を六分儀で測るより他ないからだ。

その不確な位置の母艦から、飛行機は飛び出したのである。天體を測りながら正確に飛んだとしても多少の誤差は文句がいへないわけである。

それを、またく天體を見ずに飛んだのである。二三哩も島をそれたら、あの雲の中では全然オアフ島（眞珠灣のある）を見つけ出せずに、すべての飛行機は、油のあるかぎり、とんでもない方向へ飛んで行つてしまつたらう。ハワイの島なんて、野球場におとした米つぶぐらゐの大きさしか太平洋の中ではないのである。

「この時、天佑といはうか、足元の雲が切れた間からチラと見ると、白い磯波が見える。アメリカ主力艦が、ズラリと二列に並んでゐる。我々は正しく眞珠灣の上に到着したのだ——」

と攻撃隊指揮官の手記にあるやうに、人間業では信じられないことだが、一キロの狂ひもなくピタリと眞珠灣の上空へ行けた、といふことは、天佑でなくて何であらう。と感心する前に、その天佑を招いた航空戦隊の將士の至誠に感激すべきである。

東郷長官の報告にも、この指揮官の手記にもある「天佑」といふ言葉は、自らをへりくだつて言つてゐるのである。

「自分の至誠がみごとに天に通じたのだ」といつてもいゝところを、謙讓の美しさで包んだのだ。

それをきく國民が、一しよになつて、

「あゝあれは天佑だ」

と片づけてしまつたら申わけがない。

嘗て文教に關係ある、當路の高官が、ラジオ訓話の中で、眞珠灣攻撃の成功を語り「神國日本はいつもこの様な奇蹟に恵れるのだ」

とあつさりと片づけたのをきいて、大いに憤慨した人がたくさんあつたのを、筆者は、全然同感、たのもしくきいた。

「私共の力ではなく、神様のお導きです」
と功に誇らぬ人をつかまへて、

「さうですな、あなたの力ではありませんな、皆、神様の仕業です」
と筋ちがひに感心する人があつたら、とんだ笑はれ者だらう。この放送者は、たしかに笑はれ者の一人に違ひない。日本といふ國が、この人のいふやうな、そんな都合のいゝ神國であつてたまるものではない。

「東郷は、全く運がよかつたのだ」

と主張するツイース先生も、この放送者とは別の意味で笑はれてよろしい。

腐敗しきつた本國政府と、長途のなれぬ航海に、士氣沮喪の結果、暴動さわぎまで起きた艦隊將士との板ばさみになつたロジエストウエンスキーが、どうしてもカムラン灣から歸りたくなつたといふスミルノフ中佐の言ひ分はほんたうらしい。

ほんたうとすれば、露帝の嚴命によつて、いやでも應でもウラヂオへ向ふべく同盟國のフランスからさへ、長居を拒絶されて出港したロジエストウエンスキーは哀れな立場だつた。

哀れであるから讃められていゝ、とは言へまいと思ふ。どうせ行手は死神の國、と知りつゝ行くのがツイースのいふやうに英雄なら、急行列車めがけて飛びこむヒステリー女は皆女傑である

ことでなければならぬ。

ロジエストウエンスキー長官が、朝鮮海峡へかゝつた時の氣持ちは、ロシア的ネバリ精神を芯にした、ヒステリーの「どうでもなれ精神」ではなかつたか、と思ふ。

二十七日の明け方、假裝巡洋艦信濃丸は、敵の全艦隊を朝霧の中に發見して、有名な、

「敵艦見ゆ」

といふ第一報を長官のもとへ飛ばした。

この殊勳は、正に、昭和十六年十二月十日、

「敵艦隊を發見す」

と打電して、不沈戦艦とイギリスが誇る、プリンス・オブ・ウエイルズとレパルスとを海軍航

空隊の手に、轟沈の運命と共に引わたした潜水艦(艦名残念ながら未發表)の手柄と同じである。

しかも、忘るべからざることは、無線電信といふものが發明されて、この時始めて實戦に大貢獻をしたといふことだ。

ところが、ツイースは、信濃丸の殊勳を高く買つてゐないばかりか「信濃丸は二つの誤りを報

告し、その一つは、後に、東郷を苦境に立たしめるに至つた」

といつてゐる。

日本海々戦で東郷長官が苦境に立つたことがあるとは、筆者には初耳だつた。

八月十日の黄海々戦は、味方を失はずに、敵を全滅すべき意圖から云つても、たしかに苦戦だつた。

けれど、日本海々戦は、どの兵員も、勝敗などは問題外で、たゞ、どのくらゐ勝つか、といふことばかり想像してゐた、といふほど——また、長官自信も、

「こつちは大分稽古したし、これまでの海戦で敵の手の中はわかつてゐたし、實戦の經驗をもたぬ、あらの艦隊ぢやから——樂なものだつた」

と、はじめから、かう出ればかう来るからこの手でやる、と、キチンとした全滅の設計圖をつくりあげ、實際の結果も、そのとほりに行つたばかりか、用意周到な東郷大將の七段階の戦法も第一、第二、第六、第七の四段階は實施せられず、第三、第四、第五段だけでキレイに片づいてしまつたくらゐだから、苦戦などはありようはない。

何をさしてツイースは「東郷の苦戦」といふか。こいつは面白いから、先を急がう。

日本海々戦の、直接の勝因は、有名すぎるほど有名な、丁字戦法の成功である。

丁字戦法の成功のものは、これまた有名な東郷長官の敵前回頭にある。

ツイースの苦戦説はどうやら、この二つを指してゐるらしい。

聯合艦隊とロシア太平洋第二、第三艦隊と出あつたのは五月二十七日正午過ぎ、ロシア艦隊は南西から北東に進み、聯合艦隊の主力は、東から西に航行してゐる時だつた。まもなく日本艦隊は左に舵をとつて、南西へ向ひ、両方は右側通行の関係ですれ違はうとした。

「皇國の興廢……」の信號があげられたのは、ちようどこのころで、午後一時五十五分だつた。

このまゝで行けば、両方は左舷の大砲をうちあつてすれ違ふことになるのだが、それをやれば敵艦撃滅は、まづ覺束ない、といふのは、前年八月十日の黄海々戦の苦い経験がそれを教へてゐるのだ。

旅順を脱出、ウラヂオへ走らうとした敵第一艦隊との間に戦はれたこの海戦でも、東郷大將得意の丁字戦法がとられたのではあつたが、その時期が、ほんの少し適當でなかつたために、敵は

我が艦隊の後をすりぬけて逃走し、急速方向轉換をして全速力で追ひかけた我が艦隊は、その日の日没前になつて、やつと敵に追ひつくことができた。東郷長官が苦しかつたのはこの時のことであつた。

丁字戦法とは、どんなものか、といふに、進んで来る敵を「丁」の字の縦の棒とするとその、行手をいつでも「丁」の字の横の棒のやうに我が艦隊がおさへつけることである。横の棒の各艦の片舷砲は、一どに敵先頭艦へ砲弾を送ることができるとに反し、敵の後方艦からは、前の艦がじやまになつたり、距離が遠かつたりして充分の砲撃ができなくなるのみならず、一ばん重大なことは、敵が前へ歩けなくなるのである。頭の先には相手艦隊がゐるから、そのまゝは進めない、右か左にいやでも舵をとらねばならなくなる、これは敵を受け身の戦争にさせるばかりでなく、陣型もメチャクにさせる。

二十七日の午後三時過ぎになると、もう、海戦圖を書かうにも、亂れに亂れた敵艦隊の陣型は圖にならぬため「敵陣形不明」と書かなければならなくなつてゐる。

それといふのも、丁字戦法で、頭をおさへられた上、頭にたつてゐた旗艦、スウォーロフとオ

スラビアが、忽ちのうちに集中弾を喰つて、大損傷をしたためであつた。

我海軍の戦法は、いつも敵の頭部に向つて攻撃をすることは、ずつと前に書いたとおりだ。このためには、我全艦からの集中射撃が肝要である。一方敵の陣形をかきまはしておいて、その一方一艘づつを相手に、全力をそゝいで撃沈して行く。これが丁字戦法の効果である。

同じく東郷元帥得意の「乙字戦法」といふのも、主旨は丁字戦法と全く同じで、丁字戦法よりも一層確實に、相手の頭をおさへると同時に、尻の方もおさへてしまふやり方である。午後三時十五分ごろ、第一戦隊に別れた上村中將の率ゐる第二戦隊が、グルリと大廻りに廻つて、敵の尻をおさへたのが、みごとな「乙字戦法」である。

第一第二の兩艦隊の總艦を導いて、丁の字がうまく書けるか書けないかと、日本海々戦の成否のわかれるところであり、日露戦争の勝敗を明にさせるところであり、大日本帝國の存亡を決定させる點であつた。

丁字がうまく書けたらば？

結果は、御承知の如しである。

右側通行の形で進んで来た我艦隊は、丁の字を造るためには、どこかで、急に左に折れて、敵の進路に立ふさがらなければならぬわけである。

どこかで、といふのが、最大の問題である。早すぎたらどうか。

敵は逆に左へかはすことによつて、我艦隊のお尻をまはつて、北へ逃げてしまふだらう。これは黄海々戦の時の苦しさをくりかへすことになる。

遅かつたらどうか。敵との距離が近くなつて、こつちの弾もあたるだらうが、敵の弾もよくあたるだらう。その上、味方の隊形を保つのに苦しくなる。

「隊形なんて、そんなに大切か」といふ人もないとはいへないが、一萬トンの艦が束になつて十隻あれば、十萬トンの艦の砲力を得られるが、一つ一つになれば……など、云はないでも、毛利元成の教訓を思ひ出してもらふだけで充分であらう。

早くても遅くてもいけない、といふことは、左に舵をとる時は、たゞの瞬間だけしか機會はないはずで、場所がいへば、只の一點よりないはずである。

左に舵を大きくとつた敵前回頭の成功が、日本海々戦の大捷を決定した、といつたのはこの

ことである。

敵前回頭といふ言葉は、専門語ではないが「勝利の取舵」とでも稱して、誰の頭にもはいりやすくしたいと筆者は願つてゐる。

彼我の関係距離は、九千、八千五百、とぐんぐんつまつて来る。敵の速力十一ノットで味方は十五ノットである。

この時の三笠艦橋上の有様は、あまりに有名だから省略する。

安保砲術長が、長谷川候補生（清、現大將）にかはり、測距儀に食ひついて、慎重に正確に敵の距離をはかつた、といふのは、今言つた、たつた一つの點を間違へないためであつた。

「八千五百」と砲術長の聲がして、

「どちらの舷で戦ふのですか」

（艦をまはすかまはさぬか、といふこと）

この聲が消えると同時に、長官の右手が上つて、引ッ叩くやうに左にサツと、間髪を入れず、加藤參謀長の聲が、

「艦長、取舵一ばさ」

「長官、取舵（左へ艦首がまはる舵）にします」

「ウン」

まるで、宮本武藏と佐々木嚴流との一本勝負、傍目には、アツといふ間もない、瞬間の呼吸だつた。

三笠は、絶対に他には存在しない、一點の上へ来て、グウと急に左へまがりはじめた。

これで、もう、この海戦の決はきまつたのだ、といふことは、讀者ならわかつてゐることなのに、ツイースの見方は大變にちがつてゐるのだ。

「（二列に並んだ敵艦のうち）左側の一列は（舊式戦艦ニコライ一世に率ゐられており最も劣勢だ）

東郷は出来るだけ早く、この方に挑みかゝる考へをとつた。

並行航行をとるうち（並行ではなく、反航、すれちがひの間違ひだらう）數分間にして東郷は、左舷縦列を率ゐつゝある先頭艦が「ニコライ一世」でなくて（強力な）オスラーピアであること

右舷はロシア最強の戦艦四隻が一行となつて形成してゐることを知つたであらう。(そんなことを今ごろになつて、始めて知つた東郷長官ではない)

所で、これは全く新事實だつた。これがため、彼の位置は、それまで思つてゐたとは反對に非常に都合の悪いものであつた。うっかりすると、ロシアの強力な砲火のもとに立たねばならぬ！東郷は急遽、北方に急角度を描いて旋廻し、最大速力をもつて敵から遠ざかつて、かの有名なa隊形をとつた(丁字、乙字戦法のこと)

つまり、弱い奴に飛びつかうと出て行つたが、相手が強い奴だとわかつた故、東郷長官、大あわてで、取舵一杯ツをやつたのだといふ説である。

「このa隊形は、その方向轉換の隙をねらつて、ロシア艦隊が、自分の方でも單縦陣(一列縦ならをび)形成してしまつたら、東郷にとつて非常な危険となる可能性があつた。

しかし、彼は敢てこれを行つた。

海戦史上稀有なる大旋回が展開されて行つた。東郷艦隊は、これが完了するまでは砲火を放つことができなかった。

この操作中、もしロシア艦隊が充分接近して行けば、勿論、日本艦隊の先頭艦に、砲弾を浴せかけられたであらう。されば東郷艦隊全兵員の心は、從來にない鋭く切迫した緊張に押しつけられた」

傍点をうつたところを、よく讀んでもらひたい。この假説は、かへつて前記の回頭點の重大さとその成功を裏書してくれるのである。

たゞ、ちよいと斷つておきたいのは、三笠がはじめて砲火を開いたのは、回頭をおはり、更に距離が六千五百米となつてからであつて、けつして、回頭のために、砲撃をじやまされたことはない、といふことである。

「今や、東郷は、生涯のうちに再びあるべしとも覚えぬ、危険なこと(敵前回頭)をやつた」といふ主張を引合に出して、ツイースのツシマの引例を打きる。

最後の「東郷の大冒険」といふ結論が、どうしても、ヨーロッパ人の頭から拭ひ去られないために、その結論から歸納して行く論理が、すべて、ヤブニラミとなるのである。

敢て、ツイースのみではない、現在でさへも、戦術研究家の殆んどすべては「敵前回頭」を一

大冒険と稱してゐるのである。

結果がよかつたから、ほめるつもりで

「東郷の戦術は定説を覆した」

とか、

「前人未發、獨得の冒険戦術が、見事に成功した」

とかいつて、青い眼を丸くしてゐるのである。

一生涯のうちに、冒険といふことを一度もしたことのない東郷元帥が、大切な日本海を戦で、イチかバチかの苦しい戦法をやるわけがない、といふことは、日本人にはすぐわかるのだが、白人種、ことに英米人には、わからないらしい。

東郷戦術は前人未發でも何でも無い。

日本には、三百年前に、ちやんと東郷戦術の御手本が、しかも、教科書になつて讀まれてゐるのだ。

東郷戦術は、この教科書の教へる真髓に、近代的磨をかけたものである、といふことを不思議

に氣がついた歐米人はないのである。

2 言明を實行す

「天佑と神助とに由り、我が聯合艦隊は五月二十七八日、敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戦ひて、遂に殆どこれを撃滅することを得たり」(殆どとあるのは中立國へ逃げ込んだ敵艦もあるからだ)

ではじまる東郷長官の海戦詳報を伊藤軍令部長が御前に伺候して奏上したが、いよく空前の大捷ときまると、畏多くも 明治天皇は

「東郷が出征前に申した通りになつたと仰せあつたとのことである。

「誓つて撃滅いたします」

と奏上した東郷長官は、その言のとほりに、「撃滅することを得たり」

と報告したのであつた。

前述の東郷大將の七段備へといふのは、對島水道より南で敵艦を發見した時には、第一段として主力をもつて猛攻撃をし、第二段のその夜は水雷艇、驅逐艦をして息つくまを與へぬ夜間襲撃をさせ、翌日は又主力の晝戦と水雷戦隊の夜襲で、これが三段、四段、その翌日も同じ攻撃をくりかへして五段、六段をおはり、四日目になつても、まだ討もらした敵艦があれば最後にウラヂオストックの港口に追ひつめて討つてしまふといふ準備をいふのである。

併し、對馬水道で敵に遭遇した事實は、第一段、第二段を省略させ、三段の晝戦、四段の夜戦そして、五段の二日目の晝戦に、ネボガトフ少將以下の降伏で、ケリがついてしまひ、六段七段は行はれずすんだのである。

元來水雷艇といふものは、魚形水雷——魚雷を運んで、敵艦のドテツ腹へ大穴をあけるのが役目だ。

だから、どうせ使ふならどこまでも敵の主力艦をねらふのが有利である。

といふのは、日本海軍の傳統であつて、英米などでは、少々目的がちがつてゐる。

驅逐艦といふものは、水雷艇が大きく育つたもの、と思へばよろしいが、これを、英米では、對主力艦戦には使はうとせず、モツバラ、商船の護衛や、潜水艦の發見攻撃に目やすをおいてゐるのである。

そこで、英米の驅逐艦は、自分より強い、といふより、驅逐艦狩りを得意とする巡洋艦に遭ふと、逃げだすことにきめてゐる。

これに反し、日本の驅逐艦は、昭和十七年二月二十日、バリ島沖でやつたやうに、たつた二隻で、敵の驅逐艦三隻と巡洋艦二隻の敵艦隊に出つくはすやいなや、逃げるどころか、齒をむいて突つかゝつて行き、たつた十分で敵驅逐艦二隻を海底へ送り、一隻を大破巡洋艦二隻を撃破して逃げ出させてしまつた。

世界の人は、これをきいて、

「鼠が二匹で猫を二匹もやつつけた」

といつて、常識とはあべこべの戦鬪に眼をみはつたが、元來我が驅逐艦は、敵の主力艦へ食ひつくやうに育てられてゐるのだ。

と知つてゐても、敵が非常に有力だつたのと、あまりの早業なのが我々をびつくりさせたのである。

しかし、それも、海軍の人にいはせれば、當然ですよ、といふのである。夜、我が駆逐隊にかまつた敵艦は、たうてい通れる道はない、といふのである。

前出の三保の關事件も夜である。月々火水木金々には、夜間訓練を忘れては不満である、といつたのもことである。

闇夜の鐵砲、といふことが、あたらぬ、といふことの陰語なら、我海軍にとつてだけは、當てはまらないことわざである。

闇だらうが晝だらうが、我艦隊にとつては同じことである。むしろ損得からいふと、闇夜は敵の彈があたらぬだけ、得である。

プリンス・オブ・ウエイルズのボンボン機銃の射手で、大ブリテン國（イギリスの本名だ）海軍一等水兵ジエームス・エム・ミルン君は、海中に投げ出されてあやふく一命をたすかつて後シ
ンガポールへかへり、更に砲艦の乗組を命ぜられてジャワに向ふ途中、不運にも我が駆逐艦に見

つかつてしまつた。

忘れもしない二月十三日午後九時、バンカ島附近を航行中、日本駆逐艦の攻撃をうけた（二月十三日は陰曆十二月二十八日、大晦日前の闇夜である）

敵艦だ、と思ふ瞬間、バーツと照らされた探照燈で、目がグラ／＼として大砲がうてない。そのうちに彈が飛んで來た。三發目が、機關部に命中したので油に火がつき、艦内は一瞬にして火に包まれ、艦は沈没、私はまた／＼海中に投げ出された。

そして、この運の強い水兵君は、通りかゝつた、マタハリ號に救はれたと思ふうちに、こんどは、マタハリ號が日本海軍にフン捕まつて、今では、分取船太陽號で名譽の捕虜として日本のために働いてゐる。

このやうに、我が駆逐艦の夜襲といふものは凄いのである。どうして眞暗な中で彈があたるか我々には、不思議でさへある。

東郷長官は、二十七日の晝戦で、さん／＼に敵艦をやつつけておいて、夜になると、駆逐隊水雷艇隊に得意の夜襲を命じた。

長官は、二十七日の晝戦にも、大膽不敵な水雷艇の白中攻撃さへ考へてゐたのであるが「天候晴朗なれども、波高し」あの日の激浪は、艦の小さい水雷艇隊の活動をゆるさなかつた。

駆逐隊、水雷艇隊は、三浦灣に避難を命ぜられ、齒ざしりして残念がつてゐるところへ、夜襲の命令だ。艦尾の水煙を、艦體よりも高く吹き上げ、艦上にある將士は、もう敵艦より他、何事も頭になく、眼に入らなかつた。

ロジエストウエンスキー中將は、元來、日本の水雷戦術を非常に恐れてゐた。

「特に敵水雷艇、潜水艇の攻撃を嚴重に警戒すべし」

と、カムラン灣を出るにあたつて、訓示したばかりでなく、七ヶ月にわたる航海中、日本水雷艇の攻撃に對する恐怖は、毎晩のやうに夢魔となつて長官の寝汗をしぼつた。

下につく全ロシア將士も全く同じである。

晝の戦争にメチャ／＼に味方はやられた。一塊の鐵屑となつて沈んだ、オスラーピア、スウオロフその他の最後も見た。ロジエストウエンスキー長官も、大負傷をして正氣を失ひ、

「北、二十三度東」

と、ウラヂオの方向を讒言に喋りながら、驅逐艦、ブイヌイに移され、やがてブイヌイ諸共日本の捕虜となつた。

こんなことを知つたロシア將士は、肉體的にも精神的にも、クタ／＼になつてゐた。夜になつて、ほつと一息つかうとすると、大物食の水雷艇、驅逐艦の猛烈極まる大襲撃である。

どんなに猛烈であつたか、十年の練磨を、この一夜にかけた我が艇隊は、あまりに深く敵艦の懷に突き込むので、敵の大砲は下をうてないので、マゴ／＼した。無数の蜂が懷中へ飛び込んでやたらにブス／＼刺すのと同じだ。しかも、この蜂の針は、命とりの魚雷である。

夜があけると、わづかに目にしたのはニコライ一世と、アリヨール、アブラツクシン、セニヤーウキン、イズムルート。其他の九隻だけとなつてゐた。

この、ニコライ一世に乗つてゐた、ネボガトフ司令官が、二十八日になつてまた、東郷長官の主力とブツかつた時に、とう／＼降参をしてしまつて、日本海大海戦は、戦前東郷長官の覺悟したやうな「こつちもどのくらゐやられるか知れない」といふ言葉を裏切り、一隻の沈没艦もなく幕をとちたのである。

全滅された大艦隊と、一隻も失はぬ大艦隊、これが、空前の大勝でなくて、何であらう。

3 三百年前の教科書

さて、三百年前の教科書といふのは何であるか、といふと、それは「海賊」と呼ばれた當時の私設海軍（水軍といつた）の、秘傳書である。

武装貿易船である八幡船に始まる中古の水軍は、元寇の苦しみの後に生れ、秀吉の朝鮮役の以前に終つてゐるが、その終末ごろに至ると、船の構造、航海術、海戦術など、世界中同時代に、その比を見ないほどの發達をとげてゐたのであるが、中でも、海戦術になると、殆ど、東郷戦術と一致してゐるのである。

徳川時代の鎖國といふ悪政のため、日本人の海洋精神を、二百數十年間にわたつて抑壓された後の今日、中古の海賊や水軍の發達を説いても、なか／＼信じられないのであるが、これは事實である。事實である證據として、一部分を、東郷戦術と比較して御目にかける。

水軍には、今残つてゐるものでも十いくつの流派があるが、詮じつめれば大したちがひはない

ので、最後に各流を取捨統合してできた、全流といふのをおもにとることにする。

「水軍の初めにあたり、進み来る敵先鋒を味方大勢で攻め、やにはに二三艘を討とるべし。さすれば、敵全軍の勢を挫き、勝を得る」

これが、水軍書の一貫した戦法である。

丁字隊態が完成するや「やにはに」敵旗艦のスウォーロフ（ロジエストウエンスキイ坐乗）オスラーピアに全火力を集めて「敵先鋒を討とつた」故に、敵の勢くちけ、勝敗の決が定つたのとあまりに一致してゐる、とは思へないだらうか。

東郷長官は、次々に先鋒となるべき、敵五大戦艦のうち、四隻まで撃沈してしまつたのだつた。これを水軍の書でない、イギリスのカスタンス中將が、日本海々戦と同時頃に執筆した戦術論にくらべると大分面白い。

「航進中の敵艦隊を攻撃する場合、その先頭艦に向つて集弾發射をすることは、これまで殆ど實行せられてゐないし、稀に行はれた例を見ると、盡く失敗に歸してゐるのである。

何故ならば、これは最も不利な攻撃法であるからだ」

といふのがカスタンズ中將の意見で、全然正反對の説であるから、この様な戦法を見なれ、論説を耳にしてゐる歐米人が、東郷流を前人未發だの、例のない冒険だの、中にはツイースのやうに「東郷一生涯に一度の危険」などと考へるのは、或はムリはないかもしれない。歐米人はどう考へたつてかまはない。我國では、東郷元帥でなくても、その前の日清戦争の際の司令長官だつた伊東元帥だつて、ちゃんと用ゐてゐる手だ。

こゝに、不思議なことに、たゞ一人だけ、歐米人の中にあつて、東郷長官の丁字戦法を、「日本海々戦の場合においては、この敵の機先を制し、以て敵艦を混乱せしめたのは、明らかに最善のものである」

と、條件つきで賞めてゐるのが、アメリカの海軍大佐で、有名な「海上権力史論」の著者の、アルフレッド・テイー・マハンである。

マハンの後に遂にアメリカには、マハンは出ないのであるらしい。

こんな論文を書いたカスタン中將なんて、今ごろは自説の遠に氣がついて、赤面してゐることかもしれない。

4 現代海戦術と海賊戦術

水軍書の教へる戦術を要約すると、次の三ヶ條になつてしまふ。

- 一、先づ第一に敵の將船（旗艦）を破ること
- 二、我が全體の力を集めて、敵の分散せる勢力を次々に破ること
- 三、如何なる時でも、敵の頭を笠で覆ふやうに運動すること

これが三百年前に幾多海戦の経験によつて編み出された、海戦術の大綱であるとは、東郷戦術を知つた眼で見ると、何と、驚くべきことではないか。

そこで、この法則が間違つてゐないとすれば東郷長官のつた、敵前回頭をして丁字戦法に導いた戦術は、冒険でも前人未發でも、或はツイースのいふ、弱いと思つた相手を間違へたので、あわてゝ最大の危険をおかしたのでも何でもありません。すぐわかる。

東郷長官自身、このことについて、

「あれは、冒険だつたのですかどうですか」

と質問した記者に對し、

「あれは、あゝせなければ勝てないのだ。あゝしたから、勝つたのだよ」と、端的に答へてゐられる。(二十五周年記念日に因む問答より)

「あゝしたから、勝つたのだよ」全く、嘘も飾もない。事實、我が艦隊は「あゝして」勝つたのである。

従つて、水軍の書の教へるところ、ヨクではない、どころか、我が海軍戦術の源をなし、今日に至るまで寸毫も流れを歪められてはゐないのである。

乙字戦法に至つては、敵を覆ふにも、御ていねいに、あたまと尻とから、おつかぶさつたのである。

戦後、三笠の先任參謀で、熱情家の秋山眞之中佐は、こんな海戦談をしてゐた。

「東郷大將が、かねて策定してゐられた戦術は、我が海軍ではゆる「丁字戦法」「乙字戦法」と稱ふるもので、別段新奇の戦法ではなく、歐米諸國は知らず我が國では、遠き數百年、水軍の昔より此の戦術はあつたのであります。昔の水軍の戦法では之を正奇の二隊とし、正の隊が正面

に當れば、奇の隊は側面よりかゝるといふ主旨のものであります——」

即ち、第一戦隊が正で、敵の尻をおさへて乙字戦法をつくつた第二艦隊が奇といふことになりもつと大きく見ると、二十七日の主力戦が正、その夜の水雷戦隊の夜襲戦が奇といふことになるのである。

こまかく、水軍書を見れば、一々思ひ當ることばかりだが、きりが無いから、少しばかり抜き出して見ると——

「先づ戦つて而して後に戦ふ」といふ水軍書の説明には、海戦前、兵員までも、勝利そのものを疑ふものはなく、どのくらゐ勝つか、といふことを考へてゐた、といふだけで充分だらう。

そして、水軍書では、何よりも、精神力、氣迫、といふものを重じてゐて、

「先づ勝つて而して後に戦ふ」

「不敗の地に戦ふ」

「人を致して人に致されず」

といふやうに、氣迫、必勝の信念といふことを、くりかへしく説いてゐること、今日の海軍

の先祖だけのことがある。

東郷元帥は、日本海々戦と比べて、黄海々戦の方が苦しかつた、と述回してゐられる中に、
「日本海の方は、主戦であつたのに對し、八月十日（黄海々戦）の方は客戦であつたから敵の出かたがわからず、苦勞した」といふ一條がある。

そこで、水軍書を開いてみると、あるく、主戦、客戦の説明が、ちやんとある。

「主戦とは、我亭主となり、彼客となるの意なり、主戦は客戦と違ひ、兵糧武器、何事につけても求め易けれども、勝利を得ざれば、國の存亡にもかゝる故に、客戦よりも大切なり」

あゝ

「皇國の興廢此一戦に在り」

の説明が、三百年前になされてゐようとは――

主戦とは、國を賭しての決戦であり、客戦とは待らける敵の出やうによつて、千變萬化の術をつくさねばならぬ。

勝つときまれば主戦は華々しいが、客戦は苦勞多くして、その苦は外に知れにくい。

「朝鮮海峡へ來さへすれば、こつちのものさ」

と云はれた元帥が、

「黄海々戦は、一生を通じての苦戦であつた」

と述回される意味がはつきりわかるのである。

東郷長官の得意の單縱陣を、水軍では「長蛇の備」といつて、「この備をよくのみ込んでおれば千變萬化の運用を得べく、陣形の基本である」といつてゐる。

ロシア艦隊の二列縱陣は「衡輓の備」と書いてあり、その上、

「敵隊衡輓――車の棍棒のことで、左右互に助け合つて戦ふ陣形――にて來らば、我は、長蛇か鶴翼（長蛇の各艦の向をかへたもの、即ち單橫陣）に備へ、包み討つべし」

敵が回頭を終つた三笠に對し、發砲をはじめたのは、七千米の距離からだつた。七千米では、あの訓練不足の敵の弾は中らない、と東郷長官は看破したからこそ、あの位置での回頭だつたのである。そして、六千米の距離から、猛火を浴せた我が熟練した砲手のため、先頭艦の、スウオ

「ロフ、オスラーピヤは見る／＼破壊して、鐵屑の山となつた。

これを水軍ではまた、

「虎陣のこゝろ」

といつてゐる。いひかへると「猛虎精神」である。虎は全力をあげて、最初の一撃に敵の大勢をくぢく、といふ意味である。

さうきいて、思ひ出すのは、またしても、眞珠灣の一撃である。

山本司令長官の顔が、だん／＼東郷長官の顔と二重寫しになり、更にその二重寫しは、三百年前の海賊大將軍の顔と三重寫しになつて來るのを覺える。

山本五十大將といふ筈の根をさぐると、すぐ向ふに東郷平八郎といふ大筈があり、伊東祐享といふ筈あり、更に／＼、遠く走つて、中古水軍といふ、大竹籤に到達する。また、くりかへすが、筈は、決して竹の根以外からは生えないものである。

もう一つ面白いことが書いてある。

「豹陣」「虎陣」といふので、それには、

「虎の妻を豹といふ（動物學上おかしいなんて言つてはいけない、昔の人はさう思つたのかも知れないし、動物學なんて、この際必要ない）豹を用ゐて敵を誘はゞ、敵侮りて追ひ來るに相違なかるべく、我が思ふ壺に引よせて、亭主の虎現れて、忽ち敵を嚙み殺す。これを豹陣、虎陣とす。」

信濃丸によつて發見された敵艦隊は、信濃丸に替つた「和泉」のしつ／＼とい接觸を受け、つゞいて片岡中將（七郎）の率ゐる第三艦隊につきまとはれ、誘ひの手をかけられ、引づられて、主力艦隊のゐる沖ノ島沖へ進航して來てつかまつた。

この片岡中將といふ將軍は、一度も怒つた顔を部下に見せなかつたといはれる、小柄で柔和でニコ／＼してゐて、よく見る買ひ物場で、腕づくで人をおしのけ、われ鐘のやうな聲で怒りつける婦人連に比べると、ずつと女らしく、さへ見える人柄だつた。

この片岡中將が、敵發見から、二十七日の晝戰、二十八日のネボガトフ降伏までの間、かげで東郷長官のたすけになつたことは非常なもので、特筆しておくべきだと思ふ。

一度食ひ下つたら、やさしい顔をしたまゝで、打たうが追はうが敵のそばをはなれない。

そして、やさしい顔をしながら命令を出して、チョイ／＼敵の針路のじやまをする。その度に敵艦隊は困つて針路をかへる。何度もくりかへしてゐるうちに気がつくつと、いつか日本主力艦隊の手中におちてゐる、といふことになるので、敵は、あまりのしつこさに「牛蝨艦隊」とアダ名をつけて嫌つた。

嫌はれたつて、こつちは平氣で、なほも、しつこく付きまとつて、どうにかして、思ふ場所へ連れ込んでしまふ。

典型的の女房ぶりである。これを豹陣、そして東郷主力戦體を虎陣と呼ばずして、何をか呼ばんやである。

旅順の、マカロフ長官をおびき出した、出羽艦隊も、虎の妻の豹に違ひはない。

つゞいて、

「敵、勝利を失はば、直に夜討すべし」

とある水軍書の教へは、特に説明の要はあるまい。

そして、翌二十八日、討もらされてバラバラになつた敵残存部隊を、あつちでもこつちでも、

東郷長官の意のままに撃沈したのは、水軍の「散舟その志を一にす」とピッタリ一致する。

最後に「不敗の地に戦ふ」といふ條項の中にはいる事實として、東郷元帥（當時中將）が、明治三十二年、佐世保鎮守府司令長官に補せられたことをつけ加へておく。

新任の長官は、着任匆々、席も温らぬうちに管内の巡視をしたり、艦艇を出しては、朝鮮海峡から黄海、東支那海まで出かけ、海流、風向、潮流、霧、波等について、綿密な調査をし、朝鮮南岸と鎮海灣については更に研究を深めた、といふことだ。これと、日本海々戦前六ヶ月の佐世保碇泊とで、あの邊の海といへば、我が子の顔形よりもよく知り盡してゐたといふ大切な事實がある。

更に、つけ加へるならば、東郷長官は、三笠乗組中、手づれで眞黒になつた兵法の聖典、孫子を一刻もそばから離さなかつたし、戦前病氣をされたとき、あらゆる水軍の書をくりかへしく讀破された、といふこと、東郷さんの智慧袋とまでいはれた秋山中佐は、伊豫の出身であつて伊豫の村上一家は、海賊大將軍の中心である、といふことである。

5 國家の興亡と海上權

二四八

ロジエストウエンスキー中將は、たしかに、マダガスカルまでは、猛烈な氣迫と旺盛な精闘精神とをもち續けてゐた。

ところが、ノシベに於ける二ヶ月半の無爲な滞留は、ガラリと狀勢を一變させてしまつた。寒國ロシアの兵を、悪疫と暑熱と高濕の熱帶地に、かくも長い間とゞめたことすらが、ムリであつた。その上、當然食糧に不自由を生ずる。不自由といふのは生やさしい云ひかたで、殆ど生糧品は口に入らぬ日々を送らせられた。食糧船が來ても、冷凍設備の不完全から、せつかく運んだ山のやうな肉は、海中に捨てるより他なかつた。兵員は、腐敗してふくれ上り、流れもないままに一面に白茶けて浮いてゐる肉を見ると涙が出そうになつた。どの兵隊も鼻をハンケチでおさへてゐるのは、汗のためでなく、灣内にたちこめる臭氣のためである。

艦自體も腐つて來た。底には海藻や蠟が蕃殖して、海底の岩石のやうに船底の形をかへてゐるだらう。これで、來るべき戰場で、何十パーセントの速力を出し得るだらうか。

食ひ物攻めで氣落ちした兵員の中に、不穩な空氣が生れはじめた。その毒ガスのもとには、政治的要視察人たる革命の卵どもを、島流しにする氣で、遠い東洋の戰場へ、送らうとしたところにあつた。

朝鮮海峽へたどりつくまで、暴動の起つた艦は數隻に及ぶ。

一ばん、ロ長官をイラ／＼させたのは、本國リパウ港を出ると間もなく、某國水雷艇を、日本の水雷艇と誤認して、そばにゐた英國のトロール漁船を砲撃したために、大海軍國で、日本の同盟國たる英國との間にゴタ／＼が起り、國際裁判が開かれ、同時に英國は地中海艦隊はじめすべての艦隊に、出動用意を命じたといふこと。そのこと自體のほか、ケリがつくまで足どめをくつたことだつた。

東郷長官は、いつも敵の長所をほめ、ロ提督についても

「あの長い航路を、あの大艦隊を率ゐて來た技倆は天晴なものだ」

と賞してゐられるが、この長滞在だけは首を横にふつて、

「ロ長官は、あの場合、どうあつても、一時も早く東洋へ來るべきであつた」

二四九

と、敵を惜んでゐられる。

長くなるほど、日本側の傷は癒え、準備は備ふ。一日も早く、とあせる長官の耳に、怪しからんことがきこえて來た。

それは、國際裁判に出席した、艦隊のクラード中佐が、そのまゝ本國に居すわつてしまつて、演説をしたり、文書で意見を發表したりして、妙な人氣をとり出したことである。

しかしそれもいゝとして、許されないのは、クラード中佐の意見といふのが、いち／＼ロジエストウエンスキーのやりかたを非難し「あんな艦隊で、日本艦隊に勝てるものか」と、ことごとくにコキ下すことだつた。

クラード中佐に見れば、たゞ、何とかして人氣を得たい、革命の地鳴りをはじめた本國で不安に戦く人心を、巧に文章と辯舌でひきつけることで、人氣と地位とを得ようとしただけのことであらうが、ロ長官は、癒せぬほどの大打撃をうけたのである。

クラード中佐の言説を鵜呑みにした本國では、増援艦隊を出すから、それまでは出港してはならぬ、といふ。

あんなボロ艦隊は（ニコライ一世以下、長官は凡將ネボガトフ少將）かへつて足手まとひになるから御免だ、とことわつても、許されない。遂にロ提督も投出して「とても自分の力では及ばないから免職して貰ひたい」

と、最後の哀願を送つたが、これまた、露帝によつてキツパリと拒絶された、こゝに於て、ロジエストウエンスキー中將の言動は、ガラリと變つて來た。

こんな、ロシアに對し、我が大本營では、艦隊の進退を一たん東郷長官に委せた以上、あのむづかしい三海峡論の場合にも、敵艦隊の來航がおくれた場合にも（これは、セニヤウインの故障のために、艦隊速力を五ノットにおとしたためだつた）「かうしろ」といふ命令がましいことなどは一ども打電しなかつた。それは當然であらう、當の艦隊でさへ、東郷長官に絶対に信賴して軍議一つ開く必要がなかつたからぬのだから――

どの水兵も、長官の腹などをおし考へるものはなかつた。持ち場、それだけをまごゝろで守つてゐれば、戦は、長官が勝たしてくれろ。そんな考へさへ、意識するものはなく、將兵は勝つ率を高めることにだけ熱中してゐた。

以前から人を容れる大きさのないロジエストウエンスキー中將は、この頃から、ますます人を疑ひ腹を立て、瘦せて行つた。

最後に、あてにした砲弾を積んだはずの運送船が、いざ来てみると一發の弾も積んでゐない、とわかつた時に、ロ長官の最後の吐はきまつた。いや、きめさせられた。

このころ、はじめて、ロシア艦隊は演習らしいことをしたのであるが、その條件に、實弾は三發以内、距離六千メートルを越ゆべからずといふことがある。それでも、多少は兵員の氣力回復に役立つた。役立ちすぎて、スウォーローフのブツ放した十二インチ主砲弾などは、ドミトリ・ドンスコイの艦橋にみごと命中、そこにゐた幹部を吹き飛ばしたといふことまで傳へられてゐる。

ロ長官は沈黙の人になつて行つた。といふものゝ、東郷長官も有名な沈黙の將軍である。たゞ違ふのは、東郷長官が、一度、沈黙を破ると、一言一言、珠玉の言となつて、普通人の千萬言以上の役目を果すことで、英國の新聞に、

「東郷長官ほど、言語を壓搾するに妙を得てゐる人を知らない」

と評せしめた沈黙であつたのに反し、ロ提督の方は、一たび口を開けば、その言語は罵詈

り、雑言となり、悪態となり、過重の懲罰の宣告となり、ムリな命令となつた。

ロ長官は、最も信頼すべき幕僚にさへ、自分の策戦計畫、行動の豫定などは洩らさなかつた。人を信じられない故である。

ブリボイの「ツシマ」の中に左のやうな記事がある。

「どの艦かゞ戦列を亂すと、忽ち司令長官の氣分まで亂れるのだつた。彼はすつくと舷椅子から立上り（ロ提督は不安と焦慮のため、自室に安眠できず、夜も、椅子を艦橋におかせて、そこでウト／＼してゐた）聲を荒らげてどなり出すのだ。時とすると軍帽を足元に叩きつける。すると參謀の一人が恭々しく捧げる。

艦橋はこの世の終末が來たやうな恐怖に滿される。參謀、乗組士官、信號兵、取次ぎ當直員などはぶる／＼慄えながら、無意味に眼をみひらいて、怖しい司令長官を見守る。まるで、今にも爆發しやうとする、十二吋砲の砲弾でも見てゐるやうなものだ。

最初のうちは、やり損つた軍艦の寫倒——實に選り抜きの思ひ切つた寫倒が聞えるだけだが、やがて、命令になつて行くのだ。

「木偶の坊」に、譴責の信號を上げろ！」

士官たちと信號兵たちは、この綽名だけで、どの艦を言つてゐるのかわかるので、額をぶつつけ合ふほど、急いで信號旗へ飛んで行つた。マストには、巡洋艦「ナヒモフ」を譴責する信號がする／＼と揚つた。

(寫眞を見ると、生れだけに品のいゝ顔をしてゐるロ長官が、氣狂のやうに下品な綽名をつかつて、艦橋上で喚きつゞけるのだから、神經衰弱もかなり進んでゐた)

「何處へ行くんだ『暗闇の淫賣』」

と、五渾も先きの「アウロラ」號に聞えるやうな調子でどなつたり、

「『廢病院！』」ポヤ／＼するなツ」

と、これは戦艦「シソイウエリキー」のことであるさうだ。

「スウエトラーナ」が舵をとりそこなふと、

「またあの『女中』め、スカートの中に、黄蜂でも飛び込んだやうに、バタつき出したぞ」とわめく。すると甲板にゐる水兵たちはニヤ／＼眼を見合せて

「シツ、艦橋の見世物がはじまつたぞ」と耳をすました。

6 大東亞戰現在の段階

ロジエストウエンスキーは、氣狂のやうにわめくと共に、ムヤミに石炭を積みこませた。積めるだけ積ませた、といふところだが、實は石炭の山で大砲が廻らなくなるまで積ませた。一萬三千五百トンのスウオーロフが、石炭のために一萬七千トン以上になつて、水線甲帯も、深く水中に没した。これが、日本海々戦で、ロシア艦隊が、ブク／＼沈んだ重大な原因だつた。厚い甲帯が水中に沈んで、ブリキのやうな部分が水線に来てゐた。砲弾があたれば、ブス／＼大穴があく。その大穴から、當日の高い波がどん／＼うち込んで来る。艦内で炸裂した砲弾は、忽ち四方の石炭の山を火の山とする。

そこで、この事實を知つてゐる大本營では

「天候晴朗波高し」

といふ電文を一見しただけで、照準の樂なこと、味方の彈はあたるが、不熟練の敵彈はあたらぬこと、敵艦の沈没の速いだらうことなど、一度にわかつてしまつたといふ。あの文章を綴つた秋山參謀もえらいが、たつたそれだけの電文で、戦の進行ぶりを察知した軍司令部もえらい。えらい、といふより、かう役者が描はなければ、戦に勝つことなどはできないのである。反樞軸聯合軍會議などといつて、ワシントンやロンドンでゴソ／＼會議ばかり開き、しかもその肚は、なるべく、猫の首に鈴をつける役は、自分ではしたくない、と化し合ひ、なすり合ふ談合など、たうてい、勝利の軍のすることではない。

日本海々戦は東郷長官が、「樂に勝てる」と前もつて洩したやうに、大勝した。

しかし、樂に勝てる、といふのが「遊んでゐても——」などいふ不謹慎な言葉を上にく／＼つけたものでないことは、もちろんだ。

樂に勝てる、と云ひ切れるまでの苦心。

黄海々戦の苦い經驗、新來艦隊を待つ一年の間の最後の猛訓練、それを貫く東郷長官の至誠と長官に對する全海軍の信頼。この四つが、完成されたからこそ、あの謙讓な元帥の口から「こつ

ちのもんだ」と洩らさせたのである。

山本五十六聯合艦隊司令長官の、現在の立場が、ちようど、鎮海にあつて新來艦隊を待つ、東郷長官の立場に比べられるのである。

日露戦争と比べれば、現在の戦争は、比較にならぬほど、規模は大きい。それは、兵器科學の進んだがためである。

日露役の時の戦場などは、殆ど日本近海の、そのまた一部に限られてゐたのだが、今日では、三つの大洋は已に我が海軍の制壓するところとなり、必要あらば、大西洋でも、北極南極海でも——つまり、球い地表の上ならば、どこでも戦場に選び得る。

地表だけでなく、今や空氣の最上層の成層圏の生物までも（そんなものはゐないが）高見の見物は許されないことになつて來た。前大戰を、世界戦争といふならば、今の戦争は「全地球戦争」でなくてはならない。宇宙の一員たる、地球の外廓まで、戦火の火花は噴き出してゐるのである。

しかし、戦場の大小はあれ、戦ふ者はやつぱり人間である。人間同志の戦である以上「戦争

を貫くもの」はいつも同じでなければならぬ。

「待たるゝとも、待つ身になるな」と、昔の人は、人間感情の細微を、やはらかに、完全に言ひ得てゐる。

個人同志の交渉でさへ右の如しだ。

事、國家の存亡に關するとなれば「待つ身」の辛さは、筆には現せまい。

しかし、遂に敵は來た。さすがに大ロシア帝國の面目は、有るだけの艦隊をすぐつて、一大決戦のために遼るゝ日本海へ差し向けたのである。

山本長官は、何年まつたら、敵の決戦艦隊に出あふことができることだらう。

米國では、一年たてば三萬五千トン戦艦ができると稱する。三年たてば、四萬五千トンから六萬トンの戦艦が、頭を揃へるといつてゐる。

英國では、プリンス・オブ・ウエイルズ號の姉妹艦四隻は既に完成して、ライオン、テメレーヤの四萬トン、未命名の四萬四千トン二隻が建造中ときく。

これ等が、すつかりでき上る五六年先まで待てば、米英は強くなるのか。といふと、さういふ

わけにはいかないといふのは、その間我國だつて、建艦を待つてやるわけにはいかないからだ。

眞珠灣の一撃は、米五、日三の比率を逆に、米三、日五にしたといふ。

一たん、徹底的に叩きつけられた海軍といふものは、なかゝ立なほることはできないものである。

歴史がこれを證明してゐる。手近では日露戦争で、黒海艦隊を残して潰滅したロシア海軍は、(黒海艦隊は條約によつて、ダーダネルス海峡を通つて地中海に出ることは許されない、いはゞ海軍でなくて「湖軍」である)あの巨大な工業力をもつてしても、今だに三流四流の海軍國でしかないのであるし、古くは、ネルソンに破られた、フランス、スペイン兩國艦隊が、今日、僅かに地中海のあたりを出たり入つたりしてゐるだけの海軍になり下つたことでもわからう。スペインなどはイギリス海軍の隆盛以前には、世界無敵の大海軍國で、その艦隊さへも「無敵艦隊」と名づけられてゐたのである。

我國が、何もせず眠つてゐるとして、眞珠灣で失つた艦隊勢力を恢復するのには、三年乃至四年かゝる、といふ。

日本が眠つてゐるはずはないから、同一の造船力を持つてゐるとすれば、何年かゝつても、永久に、三對五の比率は不變なわけだ。

しかも、昭和十七年六月五日、ミッドウェー島攻撃に際し、最後の頼みの綱の新式空母二隻を失つた米國は、遂に戦艦の建造を、空母の建造にふりかへると發表した。

これはそのほかに、三つあつた日本進攻路の二つは既に失ひ、北方のアリエーションズたひの路も今や完全に失はうとしてゐるので、もはや、主力艦による日本進攻の夢は、昨日のものとなつたといふ大きな理由からでもある。

これでは、山本長官は、何年待つても、心も軽く、一大決戦の機を迎へることはできないかもしれない。戦争の規模が大きくなると地理的ばかりでなく、時間的にも、想像外に大きなものとなつて来る。従つて、忍耐の期間も等比例で、延長する。

がしかし、である。

米國などでは、近頃になつて、やうやく國民も戦争氣構へができかゝつて來たやうである。もう、いやでも應でも、戦争は始まつてゐるのである。かくなつた上は、百の議論も一勝に若かず

といふことに國民の大部分が、氣がついて來たやうである。

もしも、ルーズベルト、チャーチルが、露帝とその政府のやうに、國運を一戦に賭する氣になり、ロジエストウエンスキーのやうな長官に、是が非でも一大決戦を強ひる、としたらどうであらうといふことを考へておかなければならない。

「今の英米人にそんなことが——」

と油斷してはいけない。最後のドタン場になると、彼等は苦しまぎれに、どんなことをやりだすか知れたものではないのだ。

英國は、衰へながらも、未だに傳統の海軍力に信頼をかけてゐるし、米國人といふ奴は——とにかく、南北戦争の時、南軍の海軍士官が、ボートの先へ爆薬をしかけ、北軍の軍艦に忍びよつて軍艦諸共フツ飛んだことのある人種である。

確固不拔の精神をもつて、連綿不斷の攻撃をしたのは、旅順艦隊を攻めた時の東郷長官であつた。我全力をもつて、敵の分力に乗する、といふ水軍の教どほり、彼我の均衡を破ることが、東郷元帥のいつものやりかたであるが、同じ精神、同じ目的、同じ手段で攻撃を連日つゞけてゐる

のが、現在の山本長官である。

日露役劈頭の、旅順敵艦隊の驅逐隊攻撃と、大東亞戰劈頭の、眞珠灣敵主力の飛行機及び特殊潜航艇による、魚雷、爆弾攻撃。

八月十日までに、各個に敵勢力を挫いて行つた東郷長官と、現在、マレー沖にアリニューシャンにミッドウエーにシドニーにアフリカに各個に敵勢力を挫きつゝある山本長官と……時代の異ると共に兵器や戦場の廣さはちがつても、その精神と戦略戦術は、少しのケジメもつけることはできないのである。

神意とも思へることは、東郷元帥が、戦役以前に佐世保鎮守府長官として、やがて決戦場となるべき、日本海、東支那海、黄海の一般を知悉する機会を興へられたこと、山本長官こそ、我海軍にはじめて航空戦隊が生れた時に、空母赤城の艦長であつた時以來、航空機戦法の深い體驗者であり權威者であるといふことである。

思へば、昭和十二年のころ、我が國も英國やドイツと同じく、海陸の航空陣を一つにまとめて空軍を獨立させようといふ運動が盛になつた時、絶対に反對を表明して、この危険時代を切りぬ

けた人は、山本五十六大將だつた。あの時、もし海軍航空隊といふものが消え、獨立した空軍になつてゐたとしたら……

ドイツは、海軍航空隊をもたぬため、英國海軍に對していつも苦しい戦をしたので、今後海軍航空隊が必然的に生れるであらうし、英國でも此頃になつて、航空分屬主義の利點に氣がついて來たようである。

かう考へて來れば、大東亞戰の現在は、日露役の旅順攻撃中の頃の段階にあるとうなづかれやう。決戦はいつか。それとも決戦の形にならぬうちに、英米は兩手を上げるか。

日露戦争では、日本海々戦によつてロシアの敗戦は確定した。東郷長官が、前に、九鬼男爵に語つたやうに「……媾和にするより仕方が」なくなつたのである。

その十年前の、日清戦争を見ると、清國北洋艦隊の降伏が、日清戦争の勝敗を決定した。そればかりではない。

前大戰のドイツは、大陸國でありながら、英國艦隊の海上封鎖で締上げられた結果、食糧不足で敗戦に追ひやられた。

あの、物資豊富を誇つた米國でさへ、樞軸國の力を合せての通商破壊——商船の次ぎぐの喪失のため、今や、その方面から最大の悲鳴が上つてゐるのである。

國家と海、國際關係と海、そして國民と海、この關係を、つらく考へると、東郷元帥四大訓のうち

「海はすべてを解決す」

といふ條項こそ、眞理中の眞理であると氣がつくのである。

東郷元帥四大訓の四

「陸に事ある時は海を見よ」

1 海と日本歴史

「陸に事ある時は海を見よ」

といふ金言は、國際間にゴタ／＼が起つた時はなほさらのこと、國內問題がウルサクなつて來た時にでも、海に對する注意を怠るな、といふ言葉どほりの意味と、もう一つ、これを裏から讀んで陸上のでき事で、海に關連のないことはないものであるから、或問題が起つた場合、その元を突きつめて行くと、必ず「海」といふものが最後に顔を出して來るのである。事の根本を忘れるな、といふ重大な意味をもつてゐる。

これは、人によると、ひどく唐突なやうにきこえて、一應首をかしげるであらうけれども、よ

うく考へれば納得のいくことである。

徳川幕府の倒れんとする時、人々が口にした合言葉は、

「尊皇攘夷」

「佐幕開國」

ではなかつたか。

尊皇は説明の必要ないとして、攘夷とは、力を以て外國の勢力の侵入を撃退せよ、といふことである。

開國とは、右の實力のない當時、一應ヨーロッパ人の言に従つて、鎖國の禁を解かうとする思想である。

双方とも、歐米の迫り来る力をどう處置しやうか、といふのが眼目で、その歐米勢力は、どこから来るか、となると、四方の「海」から押しよせて来るのである。

も少し、この問題を大きな眼で見ると、その根本の原因は、三代將軍家光の後年から、二百數十年に及ぶ、國家生理にそむいた「鎖國」にほかならない。

ヨーロッパ大動亂のために、幸にして外夷の侵攻がなかつた鎖國中、我國內には、温室の中でだけ咲く花のやうな、甘つたるい文化が發達した。人々はこれを泰平の姿とも考へて徳川幕府を禮讃した。幕府の役人どもは、自分たちの善政の故だと自惚れて得意になつた。温室には、妖しい花と共に、不潔なカビも生じてゐた。そのカビが、幕府の人たちの眼に入り、上を見る視力をなくした。

これを説明すると長くなるが、鎖國さへなければ、王政はとうのむかしに復古してゐたはずである。

維新の、大變革のもとが鎖國政策であるとわかれば、直接、海に關係をもつ一つの間違つた政策が、あの大了した國內問題を起したことも、直にうなづかれる。

歴史上、いくらでも、例を引いて説明できる。いや、歴史上の大事件は、盡く「海」に關聯をもつといつた方が間違ひない。

神武天皇の御東征は、海を距てた近畿地方に長隨彦といふ種屬が、皇威もこゝまでは及ぶまいと尊大にかまへたから、日向の國から船出し給ひ、當時の海上權の檜舞臺であつた瀬戸内海へ舟

師を進め給ふたのであつて、瀬戸内海の制海權を獲得するために、天皇は、備前の國高島の宮に數年を費させ給ひ、日夜水兵の猛訓練を遊ばされた。

崇神天皇の造船の詔勅を経て、仲哀天皇の御代に三韓が熊襲の黒幕となつて中央に従はなかつたためにおこつた、神功皇后の三韓征討の役は、これはいふまでもなく海の歴史である。

ところが、その後數百年にわたる、我が國の海上制覇のおかげで、國內の安穩がつゞくと、泰平になれた國民は、安逸をばかり願つて、海軍の整備を忘れたから、朝鮮へまでのびてゐた我が國權を失ひ、それに驚いて、第一回の鎖國をしたことは、やはり、直接、海を舞臺とした事實である。

元寇といふ海から來た大難の後に起つた、いはゆる和寇の八幡船の活躍が、どのくらゐ國力を向上させたか、秀吉の朝鮮征伐の出兵が、一ヶ月に千キロといふやうな陸軍の大捷を得ながら、遂に失敗に終つたのは、全く秀吉が海を忘れたからである。忘れた、といふより、陸の國內戦ばかりを経て來た秀吉が、海の重要性を知らず、ウマ／＼と朝鮮の口車に乗つて、海軍縮少——海軍全廢といへる、八幡船の禁止を命令したがためであつた。

元寇にしろ、徳川の鎖國にしろ、海が國家生活の對照とならなかつたことはない。

これは、海洋國家たる我國にとつて當然なことで、少しの疑問をはさむ餘地もないのであるが、こゝで、歴史上全く海と無關係と思はれる事件をとりあげて、東郷元帥の遺訓と照しあはせてみたい。

先づ、古いところで、平將門の亂（朱雀天皇天慶二年、一五九九年）である。これなどは、純然たる陸上だけのでき事で、何も海に關聯はなく、従つて「陸に事ある時は海を見よ」といふ遺訓は當てはまらないやうであるが、じつは然らず、當時の不便な陸路とちがつて、便利重寶な海上へ自由に航行できてゐさへすれば、討伐の易々たるばかりでなく、事を起すまでに至らしめない中央權力の浸透が、必ず物を言つてゐた筈である。

新しい方の大きな例は、明治維新についてすでに書いた。

明治以後のことは、こゝでいち／＼説明をくり返さないでもいゝだらう。

たゞ一つ、明治の西南の役についてだけ、觸れてみると、根本の原因がすでに、征韓といふ、海の向ふの問題である。

秀吉の失敗以來、朝鮮は獨立國であるか、支那の屬國であるか、または、昔ながらの日本の兄弟國であるか、甚だ不明瞭なまゝに投げ出されてあつたわけだ。

それだから、我が國が鎖國をつゞけて、一切海の方はお留守にしてゐる間に、支那の勢力が半島へのびてゐたのはやむを得ない。

そこで、明治六年西郷隆盛の征韓論といふのが討議され、破れて西郷は郷里鹿兒島へかへり、西郷を擁する血氣の人々が、ついに起つたのが明治十年だつた。

我々は、この戦亂を、殆ど陸上ばかりの戦争のやうに思ひがちである。熊本城の籠城などは、ことに有名であるからである。

有名になつたのは、苦戦であつたからである。にも拘らず、遂にこの大内亂が平定したのは、たつた二千二百人によつて編成されてゐた當時の海軍と海運の力に負ふところ大である。二千二百人の海上勢力が、五萬の陸軍を海上輸送し、敵の脱出を封鎖し、小型ながら、縦横無盡に海軍海運の受もち仕事をやりとげて、海上權の見本を見せてくれたといふことは、見のがせない事實である。

2 武士道は假面に非ず

海の歴史は、急に明瞭になつて来る。

明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂が起ると「來たぞ」とニヤリとしたのが清國で、すぐに朝鮮政府援助の援軍を出すことにしたのはいゝが、その聲明文の中に、

「朝鮮は清國の屬邦である」

といふ意味があつたから、黙つてゐられなくなつたのは、二十七年前に、腐れかけた衣をぬぎすて、生れかはつたやうに元氣潑刺となつた我が國である。

「どう、理窟をつけても、朝鮮を清國の屬邦と認めることはできぬ」と、清の聲明に應じ、こちらからも援助の兵を出すことを申送つた。

ことごとくに到れば、當然、清國と我が國とは正面衝突をしないわけに行かぬ。

思へば、神功皇后三韓征伐以來千七百年の間、この半島は常に我が國にいろくの問題を投げ與へた。それも、この清國との一戦により、永久に往昔の姿にかへり、大日本帝國と血のつなが

る兄弟國として更生することになつたのである。

時の、聯合艦隊司令長官は、日露役には軍令部長として、東郷長官と絶好の名コンビぶりを見せた伊東祐亨中將だつた。そして開戦の初頭にあたり、昔に名高い高陞號撃沈事件といふ、正當にして傍目には無暴に見える快學を敢てした、花形軍艦浪速の艦長が、東郷平八郎大佐である。

日清戦役は、翌年、九月十七日の黄海々戦で、はじめて、帝國海軍の實力を世界に示し、伊東長官の猛訓練の結實を現したのであつたが、この結果、黄海の制海權は、八幡船終息と共に我が國の手をはなれてゐたのを、三百年ぶりで見ごともどしたのである。

明治大帝は、黄海々戦の戦果を、如何ばかり嘉せられたか、次の御製を拜誦すればたりであらう。

明治天皇御製

「ころは菊月半すぎ

わが帝國の艦隊は

大同江を船出して

敵の所在を探りつゝ

目ざす處は大孤山

浪を蹴立てゝ行くみちに

海洋島のほとりにて

かの北洋の艦隊を

見るよりはやく開戦し

あるひは沈めまたは焼き

わが砲撃にかの船は

あとしら浪と消え失せぬ

忠勇義烈の戦ひに

敵の氣勢を打くじき

我が日の旗を黄海の

浪路にたかくかゞやかし

いさををたて、勇しく

各艦ともにあげ競ふ

凱歌は四方にひびきけり

凱歌は四方にひびきけり

かくて、最後に威海衛の港内へ潜んだ清國艦隊を、水雷艇の夜襲につぐ夜襲をもつて撃沈破し、遂に敵提督丁汝昌は、あつばれな自殺をとげ、我が國の大勝となつて日清の役は終つた。

水雷が發明されてから、敵港灣に飛び込んで、大戦艦と刺し違への襲撃が成功したのは、この時がはじめてである。

その猛烈さ。命をうけた水雷艇は驀進、また驀進港口に設けられた防材に衝突するや、馬飛びのやうに防材を乗り越し、港内へ眞一文字に進んだものもある。

黄海の海戦に「まだ沈まずや定遠は……」と、勇敢なる水兵に死の際までも叫ばせた敵主力の定遠、鎮遠は、七千三百餘トン舷側装甲の厚さ一尺二寸（三六糶半）といふ物凄（ものすご）いもので、我が主力の三景艦（松島、嚴島、橋立）の四千二百トンとくらべると倍近くもあるといふ代物で、と

ても、現在の我主力艦と米英主力艦とのケンカの比ではない。當時、勇敢なる水兵ばかりでなく定遠、鎮遠の名は我が國民の誰もの耳について離れなかつた。

眞暗な海面をすかすと、にわか騒々しくなつて來た港口の方から、闇よりも黒い一點が、燕のやうに一文字に進んで來る。

「日本水雷艇！」

誰のものともわからぬ聲が、消えないうちに、轟然と三十糶半砲が、四邊を晝にして、發射された。

眼の前に來てゐた第九號艇が、魚雷を發射する瞬間に、機關部に巨弾をうけて、蒸汽の白煙に包まれた。

第九號艇の終焉は定遠の終焉だつた。その放つた魚雷は、みん事定遠の胸腹をえぐつて轟沈した。文字どほりの刺ちがへである。

旗艦を鎮遠に移した丁汝昌は、遂に、到底日本海軍に敵せざるを覺り、降伏を申出で、自分は禮服を着て祭壇に香をたき、遙かに、北京の方をふし拜み、靜かに毒をあふつて、敗戦の罪を謝

した。

伊東司令長官の陣中日記に、

二月十三日 曇 水曜日

豫定の如く午前九時すぎ程軍使白旗を立て來艦、丁水師提督（丁汝昌）の返答書を齎し來れり（降伏申出について、我が方で示した條件に對する）其文の大意は、明日軍艦、砲臺、武器御受取下さるとの義なれども、數千人の私物行李の取片付あり、來る十六日まで猶豫致しくれ、云々。然るに、程少佐の談によれば、昨夜丁水師提督及劉提督、陸軍將官張文宣は自殺せりと予之を聞き悲みに堪えず……」

とあるのが、その時のことである。伊東司令長官と丁提督とは、陣中、時に書簡の往復をした。彼は伊東長官を武士道の權化と賞し、我は丁提督を清朝の忠臣と讃えた。

日清戦争は我が近代海軍として最初の對外戦で、一方、古の戦のやうな、互に武士道を解した美しいやりとりがあるかと思ふと、一面、世界最初の水雷艇の奇襲戰術のやうな、最新兵器の縦横の活躍があつた。

またもや、筆者の口癖が出るが、二千六百年の竹の根は、この時に、近代兵器といふ衣をまといつて地表に見事な發芽したのであつた。

東洋人同志は、たとひ戦の庭で面を合せても、そこに精神的な美しさを忘れては居ない。

これが、十年後の日露戦争となると、相手はヨーロッパ人に代つたから、右のやうな美しい風情はもう見られなくなつた。

日本海々戦で、最後まで残つた戦艦ニコライ一世、アリヨールは、他の三隻とともに、ネボガトフ司令官に率ゐられて、夜が ажけるやいなや、東郷艦隊に遭つた。すると、ニコライ一世は一發の砲弾もうたぬうちに、マストに「X G E」（我れ降伏す）の信號をあげ、青十字の軍艦旗を半分降した。

この時である。世に知られた問答が、東郷長官と秋山參謀との間に交されたのは——
敵の降伏信號を見ても、東郷長官は冷然として砲撃の手をゆるめなかつた。

手出しをしない相手の艦體へ、味方の砲弾が、吹ひ込まれるやうに命中炸裂する。

「長官、敵は降伏を申出てゐます。打方止めを命令されたいでせう」

秋山参謀の言葉が耳に入らぬやうに、長官はジツと敵艦を見つめたまゝである。熱情家の秋山参謀は、同じ言葉を何度もくりかへし、氣もそよろの様子だったが、遂に我慢がしきれなくなつて、顔を紅潮させ、地団駄をふんで、東郷長官の耳元でどなつた。

「長官、武士の情ではありませんか―」

長官の胸倉をとらんばかりの勢で、秋山参謀は、ハラ／＼と落涙した。

フランク・ツイースは、この時の有様を述べ、

「東郷は復讐心をもつて、砲撃をやめなかつたが、秋山参謀に詰られて、やつと砲撃を中止せしめた」

と書いてゐるが、秋山参謀でさへ、泣いて迫つたもの、ツイースが見れば、復讐とよりは考へられないのが當然かもしれない。

静かに双眼鏡から眼をはなした東郷長官は、

「降伏したのなら、艦を止めるはずぢや。敵は速力をゆるめてをらんと答へた。」

いやしくも公事と私的感情とを混同することのない長官は、すきあらば遁れん、と敵が企んでゐるのかも知れない、と、少しも心の綱をゆるめなかつたのである。

今度の戦争で、塹壕から白旗を振るので、捕虜にすべく出て行くと、二三發狙ひ射ちをしておいて両手を上げて出て來るといふのは、米英蘭軍の常套手段であるそうだ。

武士道とは凡そ反對の、卑劣無比な彼等を相手にするには、不快ではあるが、そんならそれで相手のしかたがあるのだ。

ネボガトフも、遂に通れる道なし、と覺つて、そこではじめて艦を止めた。それと同時に、三笠以下の砲撃も、蓋をしたやうに、ピタリと止ると見るまに、忽ち、敵艦は日本艦隊に包圍されてしまつた。

ロジエストウエンスキーは傷ついて捕虜となり、病床に見舞つてくれた東郷長官の情に感激しつゝ革命の野火が燃えさかるシベリアをやつと歸國して、東郷元帥を慕ひつゝ二年半の後に淋しく死んだ。

凡將ネボガトフ少將は、歸國するや、一弾も交へず降伏したことで、軍法會議を経て、銃殺さ

れた。

丁汝昌の死を、

「感心に死に申候」

と書いた東郷元帥は、ロジエストウエンスキーについては、

「できれば日本海で死んで貰ひたかつた」

と述回した。ネボガトフに至つては、批評の相手にもされないのである。

武士道とは、やたらに敵に情をかけることをいふのではあるまい。

名將マカロフが、小田式水雷にかゝつて瞬間に轟沈した時、湧きかへるやうな萬歳の轟きが静まると、誰いふとなく、名將の死を悼む哀悼の言葉を、無電に乗せて敵軍人へ送らうといふ議が出た。

これを、東郷長官は、斷乎として許さなかつた。

その理由は、遂に晩年に至るまで明されなかつたのであるが、もし口にされたとしても、いつものやうに、

「たゞ、打ちたくなかつたからちや」

といふだけにきまつてゐる。

その心は、昨日までも、今までも、最大の敵として、狙ひに狙つてゐたマカロフをたふし得たこの時、誰の心にも漲つてゐるのは、大成功の喜びであらう。

その内心をおしかくして、情らしく、心にもない吊電などを打つことに同意することができなかつたに違ひない。

武士道とはかぶつて見せる情の假面ではない、と、長官の心が語つてゐただと考へる。

3 八八艦隊

日清戦争で日本は大勝した。その大勝した日本にとつて、血をはくやうな恥辱を與へたのは、戦後に起つた、あの三國干渉である。

ロシアが他の二國を誘つて、

「日清戦争に勝つた日本が、遼東半島を領有するは、東洋平和に害あり」といふ難題をもちか

けて「すぐに清國に返したがよからう。否か、否ならば我等共同して御目にかゝらう」といふのが、その主旨であつた。

日本は大國清に勝つた、とは言ひながら、それは國運を傾けつくして、やつと勝つたのである。負けた清國は、内部は知らず表面は、ほんの引つ掻き傷の程度にしか打撃をうけてゐないやうに見えるに反し、我が國は維新以來やうやく二十八年、勝つは勝つたが、全身は血にまみれ、手足の爪ははがれ、この上、どうして、歐洲の三大國を向ふにまはす力があらう。

三國干涉の結果は、畏多くも、悲痛を極めさせられた詔勅となり、血で購ひとつた東遼半島は返還のやむなきに到つた。

國民の誰でもが齒をかみ、涙をのんだのである。

それは、ワシントン・ロンドン兩條約の時の比ではない。あの時の我國は、興隆の一途をたどつてゐたのに反し、四十七年前のその時は、やうやく東洋の一角に顔を出したばかりの時である。そしてワシントン、ロンドン會議の時のやうに、英米式自由主義、國際主義などいふものがなかつたゞけ「今に見ろ」といふ氣慨が國中に溢れたことは、讀者に、當時を知つてゐられる

祖父でもあればきいて見るがいゝ。

東郷大佐は浪花の艦長室で、これを知るや、默然として差うつむき、語を發せざること幾時、その顔色は蒼さめ、眼は異様に光つて、早くも、次に見えるべき敵を心中に、はつきりと描き出してゐたのであつた。

「東洋の平和に害」あるが故、日本に手をひけといつたロシアは、その舌の根の乾かぬうち、眼目の遼東を清から借り受け、旅順に要塞をきづく、滿洲に鐵道をひく、遂には朝鮮半島にまで手をのばさうとしたから、この間十年、臥薪嘗膽を文字通りに經驗し、力を養ひ、訓練をつとけて來た我國は、遂に滿鮮の地から、暴逆ロシアの魔手を拂ひのけるべく起つたのである。

これが日露戦争であつた。

英國は日本と同盟をむすび、その巨大な海軍力と、到る處に持つてゐる基地と、得意の宣傳謀略を使つて、ことごとくにロシアを苦しめた。

何も、日本が可愛いゝから、さうしたのではない。支那に野心のある英國は、ロシアの勢力を東洋から追ひ拂ひたかつた。もう一つヨーロッパに覇を唱える大ロシア帝國の力を、日本の力で

殺がせたかつたのだ。

何事をするにも、決して自分の身をいためず、他人をそのかして事をはこぶのは、英國の傳統的精神だから、恰もよし、東洋の一角に、ニヨキくと頭をもたげて来た、新興日本の國策がロシアの利害と衝突するのを利用して、日本をけしかけたのであつた。

「東洋の番犬日本」

と、英國人が云つてゐたのがそれを證明する。

彼等は、犬に肉を與へて、恨みのある人間にかみつかせやうと企んだのだ。であるから、いくら東洋の新強國といつたつて、ロシアには敵ふまい、幾分でもロシアの力を殺ぎ得れば我事なれり、と考へたのに反し、その番犬が、大きな白熊の喉笛を噛み切つてしまつたのを見ると「こいつは用心しなければならぬ」と警戒しだした、番犬と思はれたのは、じつは犬ではなく恐るべき獅子であつたのだ。

「用心しなければ危険だ」

と考へてゐるうちに、日露戦争を遠因としたお鉢は自分の方にまはつて、日露役後十年たつて

第一次大戦が、眼の前で破裂してしまつた。

老獺の本家たる英國は、こゝで、もう一度番犬を役にたてることを忘れなかつた。

我が國は、日英同盟の誼みで、青島を攻略し、英輸送船の護送もやり、地中海へまで出撃して英國をたすけた。

大戦は終つた。結果は辛くも、聯合國側の勝となつたが、じつは、あと一週間の食糧攻めで英國は参るところまで行つてゐた。大英帝國は歩けないほど疲れ切つてゐたのであつた。疲れないのは、日本とアメリカだけである。

アメリカは、かき集めた金で、世界一海軍を造らうと、野望を抱き、實現に着手した。

この張本人の一人が、海軍次官をしてゐた、フランクリン・ルーズベルト、即ち、現アメリカ合衆國の大統領として、日露役のロシア首腦者たち以上の誇大妄想患者である現在の敵である。

東郷長官は、三國干渉のことがおこると、一室に瞑想して、次なる敵を心にえりつけたが、日露戦争が終ると、早くも、またまた、次に砲火を交ふべき敵を頭に描いた。

日露戦争當時のアメリカ大統領は、セオドア・ルーズベルトといふ、大事好みのガンコ爺であ

つた。(現大統領フランクリン・ルーズベルトを、セオドアの甥だと書いてゐるアメリカ新聞もあるけれど、系圖をしらべてみると、五代ほど前にわかれた遠い親戚であるが、兩方とも、殆ど混り氣なしのオランダ人で、従つて共通のオランダ人的ガンコさが事を誤る原因である)

日露役の仲裁を買つて出たのは、このセイドア・ルーズベルトで、大海軍論者のセオドアは、心から東郷長官の大業績を讃えた。しかし、一方では、アメリカの鐵道王といはれるハリマンが日本が血で購つた南滿洲鐵道を、買つてあげてもいい、ともちかけて來た。

滿鐵は滿洲の動脈である。滿洲は日本の西北の生命線である。媾和會議から歸つた、全權小村壽太郎侯が顔色をかへ、一命にかへても、この契約を打ちこはしたからよかつたが、さもなくば日露役で金を使ひはたした我國は、金ほしさのあまり、ほんの目くされ金で、自分の動脈をばなす危いところだつた。この頃から、アメリカの支那への野心が露骨になつて來る。

支那を手に入れたい、といふのは、アメリカの國策である。中南支は本家の英國が、すでにアヘンといふ毒物を巧に使つて、抵抗不能の状態にした上、グイと抑へつけてゐる。

さらば、滿洲北支だけは、金の力で、アメリカの自由にしたい、と明けくれ考へるアメリカは

支那の防塞のやうに、長々と横はる日本帝國といふものがどうにも邪魔になつて來た。

その日本は、次第々々に強大になつて來る。

これはもう、實力でたゞきつけるより方法がない、となつた時に、アメリカは、前大戦のおかげで、金もちの上に金もちになつてゐた。

「軍艦を造れ、海軍を造れ、たとひ日本の海軍が如何に強大でも、金にものを言はせて競争をつゞければ、貧乏國日本は、ぢきに參るに違ひない。さうなれば、あとは我がアメリカの海軍力がいゝやうにしてくれる」

かう考へて、大建艦計畫といふのを發表したのが、一九一六年(二五七六年)であつた。

三年計畫といはれたもので、戰艦十隻、巡洋戰艦六隻、其他を三ケ年以内に造るといふのだつた。これができたら、我が國は大變だ。

コロラド、メリーランド、ワシントン、ウエストバージニア、インディアナ、ノース・カロライナ、サウスダコタ其他、三萬二千トンから四萬三千トンの戰艦と、サラトガ、レキシントン、ユナイテッドステーツ、コンステレーション、コンステイテューション、レインジヤー六隻の、四

萬三千五百トン、十六インチ砲（約四十種）八門、速力三十三ノット四分の一の巡洋戦艦六隻とである（今は巡洋戦艦といふ艦種は日米兩方にないが、戦艦とも戦へて、速力は巡洋艦に匹敵する、といふ艦である）

この計畫をきいた我海軍當局は、實に血のにじむやうな苦しい算段をした結果、でき上つた計畫といふのが人も知る八八艦隊といふのである。

筆者たちは、そのころ、このことを聞いて、できぬうちからスバラシイ八八艦隊の幻を頭に描きさらに、この堂々たる五十隻にも近い主力艦が（新建造以前の戦艦もふくめて）太平洋上で一大決戦を交へる、人類はじまつて以來の大壯觀を想像して、胸をおどらせたものである。

大正九年（二五八〇年）にこの案は議會を通過した。

長門、陸奥の三三、八〇〇トン、十六インチ八門。

加賀、土佐の三九、九〇〇トン、十六インチ十門。

紀伊、尾張の四五、〇〇〇トン、十六インチ十二門。これが戦艦で、巡洋戦艦になると――

赤城、天城、愛宕、高尾の四三、〇〇〇トン、十六インチ八門。

八號、九號、十號、十一號（まだ名がつかない）が、四六、〇〇〇トン三十三ノット半で、なんと十八インチ砲八門。

十一號、十二號の戦艦となると、當時は化物のやうに考へられたくらゐの代物で、四八、〇〇〇トンで十八インチ砲十門といふデカさだつた。

軍艦といふものは、常に取組むべき相手の力を計つて自分の計畫をたてるものであるから、この一つ一つを、アメリカの新造艦に比べると、砲といひ、速力といひ、防禦といひ、斷然問題にならなかつた。

これだけが、我が海軍の主力か、といふと、さうではない、現在第一線で御奉公をしてゐる、伊勢、日向、扶桑、山城、金剛、比叡、榛名、霧島の八主力艦を、第二艦隊として、豫備におかうといふのだからアメリカは驚いた。

こゝで一つ、どうしても覚えておいて貰ひたいことは、アメリカといふ國では、發表された計畫どほりに建艦が進んだことは、いまだ會てない、といふことである。

現在でも、すぐに、飛行機六萬臺計畫とか、何百萬トンの艦艇建造とかいふが、今までの例に

よれば、なか／＼豫定どほり完成するものではない。

この時代でも同じことだつた。

紙の上の大艦隊はできても、實際の艦は、いつまでたつても一向にでき上らなかつた。それにくらべると、我が國の方は「食ふ物も食はずに完成させて見せる」と、全國民が一度肚をきめるや、計畫は着々として進んで行つた。もうしばらくして、アメリカでやつと一隻か二隻の戦艦ができるといふころには、日本は、十六隻ヅラリと並べてお目かけやう、といふ次第になつて來た。

この時分の、我が海軍の威勢のいゝことゝいつたら、兵學校の若い生徒たちまで、すぐにも大海戦に出陣するやうに、ピチ／＼ハリキツてゐた。

それに引かへ、競走をしかけておいて、えらいことになつて來たのは、アメリカだつた。このまゝ進めば、いつかは、日本海軍のために、一つぶしにされてしまふかもわからないのだ。

「何とかしよう。何とかしなければ」

と、眼の色をかへ、づるいことにかけては世界一の本家の英國に相談し、やつと考へついた計

畫が、ワシントン會議であつた。

4 東郷元帥と飛行機

大正十年に開かれたワシントン會議が、米英の口にするやうな「世界平和のため」でなく「自國の海軍を有利にするため」であることは、こゝまでを読んで來た人には説明の必要はないだらう。

加藤寛治といふ名が火花のやうに世の中の人の前に知られたのはこの會議後である。

この會議は、開會するや否や、米國務長官ヒューズが、

「米英は大國であるから戦艦の割合を五とし、日本は、そんな必要もあるまいから三の割合にきめよう」

といひ出した。

獨立國と獨立國との會議であるのに、日本は三でいゝはずだ。とは何といふ失禮な言ひ分だらう。

こんなことを云ひ出しはすまいか、とひそかに考へてゐた加藤寛治大將は、頑として十對十、對等の海軍力を主張した。

が、しかし、この會議は、外交では日本が敗けた、といふより輿論の力で失敗したのだつた。米英は、全力をあげて新聞其他の言論機關を動員して、自分たちの説を支持させたのに、我が國では、一ばん大切な言論を統一し、輿論をまとめる點で遺憾があつた。

そのころ、己に自己主義がはびこつてゐた我が國內では、ムリをして、大海軍をつくるにも及ばないではないか、と、今日から考へると、まるで嘘としか思へないやうな議論が行はれたことも、當時を知つてゐる年輩の人には、すぐ思ひ出せることだらう。

輿論の後楯のない外交はいつも失敗する。

八八艦隊の計畫について、今日まで骨をけづるやうな苦勞をつゞけて、やつと形がついたと思ふと、この難題である。加藤寛治大將は、或は怒り、或は泣き、或は訴へて、最大の努力をしたが、國內がこれではどうにもならぬ。遂に、五、五、三の、屈辱的比率は成立して、三笠をはじめ、新舊の戦艦は、或は鐵屑にされ、或は、實彈射擊の的にされることになつた。

加藤大將は、國家守護の大功あつた戦艦が、我が砲彈で撃沈される、その前の晩は神酒を捧げ宿命を悼んだ。

東郷元帥は、頑として、實彈射擊の見分を拒絶した。

年若く血氣の將校連は、沈み行く戦艦の上に、アメリカの黒い影をハッキリと見て、一人残らず泣いた。この若い將校たちが、今の戦に、それ〴〵の長となつて、あの勇戦ぶりを見せてゐるのである。アメリカは、知らずに、いゝ精神訓練をしてくれたものである。

天に向つて唾を吐けば、己の顔へかへつて来る。正義に向つて矢を射る者は、その矢がグサと己の腦天へ突きさゝることを覺悟せねばならぬ。

我が海軍は、このワシントン會議以來、アメリカを假想敵として猛訓練をはじめたやうに思ひ違へてゐる人があるが、それは間違ひで、次の敵はアメリカ也、と早くも肚をきめたのは、日露戦争が終るや否やであることは、己に了解されたことと思ふが、もう一つあまり世間に知られてゐない話をつけ加へると、明治四十四年六月、ロンドンで行はれた、英帝ジョージ五世の戴冠式に御名代として御渡英遊ばされた、東伏見宮依仁親王同妃兩殿下に隨行して、陸の乃木大將と共

に、東郷元帥は青年時代に學んだ英國へ、四十年ぶりで渡航したのであつた。

そのかへり途に、殿下に御わかれ申上げた元帥は、何を思つたか、西まはりの途を選び、アメリカを横断したのであつた。

ニューヨークワールド紙の記者は、東郷元帥が米國の飛行機の飛ぶのを、ジツと鋭い眼で見ているのを見て、質問をした。

「アメリカの飛行機は如何です？」

元帥は答へた。

「じつにみごとに飛ぶ」

また別に、ニューヨーク・スター紙は、さんく不遠慮な質問をしたあとで、こんな問答をした、と報道した。

「では、こんど締結された、國際仲裁々判ができたからには、海軍の必要はなくなると御考へですか」(國際間のゴタ／＼を各國の代表間の裁判でさばかうといふ條約)

「いや、そんなことはない。各國は海軍を備へ、武備を相當に用意すべきである。のみならず

軍艦も、だんく大きくする必要がある」

新聞記者との問答は、口数は勿論少なかつたが、口を出た言葉は、すべて虚飾のない、ほんとの吐だつた。當時、これを、そのまゝ正しく受とつた人は、アメリカにも世界にもあまりなかつたやうだ。

その頃の飛行機といへば、海軍では、追濱(今の横須賀航空隊)で、やつと、二臺の飛行機が朝の無風時をねらつて、訓練飛行をはじめたかはじめないかの時だつた。

東郷元帥の眼には、すでに、飛行機といふものゝ將來が強く映つてゐたのである。

大正三年、元帥は、左のやうな歌をつくつた。

飛行機も、やまと心にあやつらば

やがて世界に敵なかるらむ

そして、そのころひそかに「海軍は萬難を排して、飛行機〇〇臺を整備すべきである」といふ意見が、元帥の口から某方面に語られたのであつた。何事にも、誠意、身を以てあたる元帥は、多摩川に所有の農園に、クルミの木をたくさん植ゑて育てた。

「クルミは飛行機のプロペラになるからな」

と元帥は洩した。つい最近まで使はれてゐた木製プロペラは、クルミや楓や櫻の板を合せて造られてゐたのである。(この農園は今、東郷寺となつて堂宇の建築中である。當時のクルミも、六七米の大樹となつて境内に残つてゐる)

これが、大正三年のことであるから、この年代を忘れないでもらひたい。

まもなく、同じやうな考へをもつて、

「これからは、飛行機が物をいふぞ」

と、一生懸命飛行機の進歩發達をうながしたのが、山本五十六大佐だといふから、この時すでに、山本大將は「次の主役」を約束されてゐたのであつた。

第一回の軍縮會議(ワシントン會議)で、遂に五、五、三の比率を承認し、涙をのんで日本代表が引あげて歸ると、加藤大將(寛治)は、あまりの心痛のため病氣になつた。病氣がなほるや否や、第一番に駆けつけたのは、東郷元帥の邸だつた。

この會見のことは、このころでは有名になつてゐる。

病後の加藤大將は、ケンカに傷ついた兒が、親の前へ出たやうに、元帥の顔も見られず、下うつむきながら、

「この度のことは、誠に不行届で相すみません」と語尾を嚙んで、更にうつむいた。

すると元帥は、悲痛な色を浮べるところか、何の感情の動きも見せず、

「ぢやが……訓練に制限はないのぢやらう」

と、ムヅリといつた。加藤大將は、これをきくと、しばらくは、何ともわからぬ顔をしてゐたがやがて内心からつき上げて來る光のやうなものを感じて、

「訓練に……制限はない……」

と、呟いたが、急にその顔は紅潮し、眼は希望の光をとりもどして、兩肩をゆすつた。

元帥の一言は、みごとに加藤大將を救つたのだ。いや日本海軍を救つたのだ。

その後第二艦隊司令長官、聯合艦隊司令長官と、つゞけて就任した加藤大將のやりかたは、三保の關事件で前に話した。

「東郷元帥の言葉はこゝだ——」

ともすると、猛訓練の犠牲となつて死んで行く部下のことを思ひ、暗然とする時、加藤大將は身ぶるひをしてさう思ひ出した。

ワシントン會議でまづ主力艦について成功した米英は、次には、補助艦艇と、最も恐しい日本の潜水艦を削り取らうと企んで、昭和五年ロンドンに、ロンドン會議を開いた。我が國は、はじめからかけ値なしの最低限度を開つばなしにして、對英米七割を主張した、にも拘らず時の濱口首相と、全權若槻禮次郎は、これさへも支へきれずに、讓歩に讓歩して歸つて來た。

不思議な因縁といへばいへる、ワシントン會議で死ぬほどの苦杯をなめた加藤寛治大將は、この時軍令部長の要職にあり、今度こそは、と、全身をあげて、主張貫徹に東奔西走したが、世間は、ワシントン會議當時より、もつと悪くなつてゐた。街にあふれるのは、エロ、グロの洪水だつた。日本人は、みごとに、ユダヤ的策謀の、三日政策、スクリーン、セックス、スポーツの甘い毒酒に酔ひしれてゐた、こんな時、加藤大將が如何に力を盡いでも、世評を重んじる政黨内閣が、不人氣な政策を實行したくないと考へるのはしかたがない。

ワシントン、ロンドン兩會議を開くに先だち、その方面の得手者の英米は、すでに、ユダヤ的

陰謀をもつて、輿論をつくるべき國民の骨をやはらかくするのに成功してゐたのだらうと考へられる。

これでいゝ、と笑壺に入つた米國は、翌昭和六年九月十八日、張學良をそゝのかして、滿洲に日本追出しの火の手をあげさせた。

その結果は云ふまでもない、アメリカの思つたとはまるで反對な結果を生じて、新しく日本の兄弟國たる滿洲國を生れさせてしまつたではないか。

國務長官ステイムソンは、これに驚いて、いろ／＼おどかしの手は用ゐたが、米國海軍に必勝の自信が持てないことを知つては、どう手の出しようもなかつた。

「陸に事ある時は海を見よ」

かうして、純粹の大陸問題である如く見える滿洲事變も、やはり海から生れた事件である。

5 大陸問題と海

支那事變といふものが、滿洲を追はれた英米ソが、もう一度日本追出しにかゝつた仕事だとい

ふことは申すまでもないことであらう。

そして、支那事變の起るや、我々は、改めて海を見なければならぬことも、これまた申すまでもないだらう。

大東亞戰となると、もう、いくら海ぎらひの人でも、海そのものゝ戰爭であることは否定できないはずだ。

「併し、人間はどうしたつて陸にすむ生き物だ、どう苦んだつて水中棲物にはなれつこない。ことに現在日本にとつて最も大切なことは、南の一つの島をとるよりも、支那事變を解決することにあるのだ。

南方々々といふが、北の大陸を輕んじて、何の南方ぞ」

と、いふ人が萬一にもあつたら、それは本末顛倒の變痴奇論でござる、と、お答へするよりない。何故ならば、

その、大陸問題を解決するためにこそ、海が大切なのであるからだ。

小兒のケンカのやうに、あげ足とりの云ひ方だが、第一、大陸へ兵を送るのには何によるか。

輸送船を使ふよりないであらう。

飛行機？ 現在の飛行機で、支那大陸を席捲するに足る兵と、兵器、軍需品をはこぶことができるかどうか。

輸送船を安全航海さすためには制海權が必要だ、制海權を獲得するのは、海軍のつとめである。逆に、制海權やぶりの敵潜水艦は、これこそ文字どほり海を利用して五千四百哩を渡つて來るのである。

更に、戰場は、海洋の割の陸しかもたぬ南半球に擴大されてゐるのである。これら海の戰爭は、みな、大陸問題も同時に解決する必要からなされてゐるのである。

そこで、筆者が言ひたいのは、この戰爭についてではなく戦後のことについてである。船がたりない、といふ言葉は、このごろ、やたらに新聞で見るところだ。現在世界中の國で船のたりてゐる國などといふものは一つもない。

米英は船不足で、或は參るのではないか、と思はれる位であるが、我が國とても、船がたりない、すこぶるたりない。

南方に山とつまれた物資も、船のたりないために、内地の人の手にわたり、生活をたすけることがむづかしいのである。

戦後、大東亞共榮圏が一家となり、互ひに、たりないもの餘るものを、交易することになれば現在の何倍かの船が必要になるであらう。

その時、香り高いコーヒー、おいしい果物になれて、海をわたつてそれ等を運んでくれる船員を忘れては相すまないことになる。

砂糖の特配などの新聞記事に、

「兵隊さんの賜り物」

など、見出しをつけてゐるが、ほんたうは、

「兵隊さんと海員の贈り物」

といつてもらひたいのである。

今から、海をおろそかにすることは斷然避けたい。

フィリッピンだけでも、七千八百とかの島があるといふ。

多くの大地に、多くの人種を擁して、八紘一宇の御精神で、これ等の面倒を見てやることになれば、それだけでもいろ／＼な問題が起ることは當然である。

更に、外部から——或は、共榮圏の繁榮を打ちはさうとし、或は我が國の立場を危くしようとして、これまた種々様な悪魔が、手をかへ品をかへて、働きかけて來ることも必ずあり得るのである。

その時になつて、どんな問題が起らうと、

「陸に事ある時は海を見よ」

この大遺訓さへ忘れなければ、相手の意圖を封ずることは易々たるものであらう。もちろん、

「常に軍艦旗を見つめてゐる」我が海軍は益々大に、健全であるのだからだ。

その海軍は、

「海から來る敵は海上で防げ」

の眞理にもとづいて存在するのである。

飛行機？なるほど飛行機は、数年のうちに、飛躍的發達をするにちがひない。その結果、或る者はまたく飛行機と戦艦の比較論などを、今よりはもつとく猛烈に戦はずだらう。

しかし、斷言する。飛行機は、制海權を獲得する、一つの有力な手段として絶対必要なので、飛行機そのものが、制海權確保の役を、主力艦に替つて果すことはないのである。

常に海への注意を怠らなければ、やがて海はすべてを解決してくれるであらうこと長々と記し來つたとほりである。

自然科学の領域でさへ、海に一ばん縁のなさそうな、高山の——富士山であれ、日本アルプスであれ——何千米の頂上が、海上に出現する、恐るべき颱風の襲來を、高空の不連続線の出現によつて、一ばん早く豫知する立場にある、といふことを、山好きで海嫌ひの人たちに考へてもらひたい。

6 東郷元帥は生きてゐる

日清戦争の伊東司令長官は、前に書いたやうに、二千六百年の海洋日本精神の根から、勢のい芽を出させ育てた。

日露戦争の東郷司令長官は、伊藤長官の育てた芽に、美しい大輪の花を咲かせた。日本はこの花のおかげで、世界的となつた。

慧眼なる英國人の評論家ウキルソンは、當時この花を見て、

「白色人の咲かした花はすでに盛をすぎた。恐らくは今世紀内に、全世界に馥郁たる香をたゞよはすのは、日露役で咲いた、黄色い花にちがひない。

白人の世界支配はすでに終らうとし、來るべきは強力なる黄色人種の世界統一である。」

と、感心なことをいつてゐる。圖書館へ行かぬチャーチル、ルーズベルトは、おそらく今までにこんな豫言を身うちの者が言つたとは知らないであらう。

花は實を結ばねばならぬ。その實こそ——

今更説明の必要はありはしない。

我が海軍陸軍が、昨日も今日も、何處でも、こゝでも實を生らせ、刈りとつてゐるのである。花は準備時代の終了を表す。日露役で、日本が果すべき大使命の準備は了つたといつたのはこのことである。

大東亞戦が、はじめて、八紘一宇の御精神を世界にひろめ、世界の人間を撫でいつくしみ給ふ積極的の大事業であるといふのも、このことである。

至誠をつくす人には必ず天佑が来る。

大戦争中のわれわれは、この一條を寝てもさめても忘れずに、更にもう一つ、東郷元帥の戦法である、

「不拔の精神をもつて敵に備へ、機ある毎に、敵の苦みとするところを電光石火一撃する」
云ひかへれば、

「長期戦の心がまへにゆるみを與へず、敵來らば、直に轟沈する」

この簡単な二つの精神さへ忘れなければ、米英が何を策さうと、何の恐れることやある——ど

ころではなく、彼等が一つ奮動することに、我等の輝く新世界は完成し美しくも正しい平和は一步づつ近づくのである。

至誠は日本人のもつ最も大切な寶である。

この心を持ちつゞける間、我が國は、何國と争はうと、屋臺骨は貧乏ゆるぎもしないのである。

なぜならば、至誠の反映たる天佑神助は、必ず我が國の上に降るのであるから——

至誠の人東郷元帥は、皇國海軍といふ有形の存在となつて、明らかに生きてゐられる。

元帥の至誠は、海軍魂と化し、無邊際の大きさに擴がつて、全地球を、今や、稜威の光明もて覆ひ盡さうとしつゝあるのである。(おはり)

あとがき

この本を「轟沈」と題したのは、御稜威に双向ふものに對する、東郷元帥の不斷の信念が、そのまゝ今日の我々の決意に一致すべきであると信ずるからである。

それともう一つ、本文中に繰り返して述べたやうに十二月八日以来の眼眩めく程の大戦果は、無が有を生ぜしめられた奇蹟でなく、この大筒の根の因つて來つた経路を、あらためて明瞭に認識することが、戦ふ國民の不動の覺悟と、輝しき大勝利を確信して一路邁進するための原動力の一つであると思ふのである。

何故、そのために東郷司令長官を中心として述べなければならなかつたか、それは、もはや御了解を願へたと思ふが、足らずとすれば、それこそ東郷元帥といふあまりの大物に取り組んだ筆者の力量の足りないがためである。

最後に、御指導と御援助を仰いだ海軍報道部の一色主計中尉、清水海軍省囑託、私の父、わけ、序文まで寄せられて、この一弱小艇に、光榮の大旗を掲げさせて下さつた、大本營海軍報道部課長平出英夫大佐に、厚く厚く御禮を申し上げます。

大東亞戰勃發一週年を前にして

著者

昭和十七年十二月十一日印
昭和十七年十二月十五日發
刷行 (五、〇〇〇部)

定價一圓七十錢

著者 小笠原淳隆

發行者 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 廣安與三右衛門

印刷者 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 清水

印刷所 東京市麹町區麹町三丁目十二番地 水印刷所

沈 轟
(出文協承認)
(あ 350349 號)

日本出版文化協會
會員番號120116

發行所 東水社

東京市麹町區麹町三丁目十二番地
電話九段(33)三三〇・二四〇・三二二番
振替口座東京七一・二九七番

元 給 配
日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

東水出版社圖書目錄

皇國の書 昭勅講究所長 森清人著	一・五〇	海釣り三昧 谷口北海著	一・七〇
人間の吉田松隆 品川義介著	一・七〇	將棋上達四週間 八段 小泉兼吉著	一・五〇
海軍省推薦 海軍中將 植村茂夫著	一・五〇	將棋名局を語る 八段 金子金五郎著	一・五〇
陸軍・文部・文協推薦 陸軍中將 和田龜治著	二・五〇	將棋と人生 名人 木村義雄著	一・七〇
くろがねの父 永松淺造著	一・五〇	長篇小説 鐵の愛情 諏訪三郎著	一・三〇
轟 沈 小笠原淳隆著	一・七〇	愛は惜みなく與ふ中河與一著	一・五〇
船は聞ふ 元淺間九船長 安東陽一郎著	一・五〇	科學小説 海底トンネル 寺島柁史著	一・八〇
隨劍と人 松波治郎著	一・五〇	忍術から スパイ戦へ 藤田西湖著	一・五〇
日本名將傳 松波治郎著	一・五〇	航空魂 陸軍中將 江橋英次郎著	一・五〇
若き義勇軍 田村直治著	一・五〇	海を征く 海軍大將 高橋三吉著	一・五〇
シンガポール 卅五年 西村竹四郎著	二・三〇	雷撃機 海軍少將 松永壽雄著	一・七〇

送料各册内地一錢五分・外地二錢





¥ 1.70